

狭山市文化財調査報告第27集

狭山の旗本
小笠原家調査報告書

2007

埼玉県狭山市教育委員会



天岑寺 旗本小笠原家墓所

絵 池原昭治

序

天岑寺小笠原家の墓所は、これほどまでに旗本家累代の墓石が並んでいるところは埼玉県内でも少なく、狭山市にとって重要な文化財であります。しかし、この墓所に並ぶ墓石の内容や小笠原家の事跡は研究がなされておらず、余り知られていませんでした。これに光をあてたのは、平成１６年７月に開催した狭山市文化財講習会での「狭山楽史会」による研究発表でした。

本調査は、狭山市が小笠原家の研究を手がけていた狭山楽史会に委託したのですが、その成果は、狭山楽史会の自主的かつ献身的な情熱によるところが多であります。

本調査成果により、天岑寺小笠原家の墓所の内容及び系譜が明らかになり、当市教育委員会では、平成１８年１２月１日付けで当墓所を史跡に指定しました。

狭山楽史会は、狭山シニア・コミュニティ・カレッジ（略称ＳＳＣＣ）の修了生により平成１６年に結成された歴史研究サークルであります。平成１２年のＳＳＣＣ開講以来、生涯学習で蒔いた種が花を咲かせたようで、その修了生の手による成果がここに上梓できることを嬉しく思います。

本書は、歴史研究サークルが市民の視点で調査し、市民を対象に執筆しており、小笠原家の系譜のほか、江戸期の旗本の領地支配、役割や生活などが容易に理解できるようにになっています。

本書により旗本小笠原家を多くの市民に知っていただき、狭山市の歴史や文化を知る手助けになれば幸いです。

最後に、調査執筆にあたられた方々、また調査にご協力をいただいた多くの方々に感謝を申し上げ、序といたします。

平成１９年３月

狭山市教育委員会

教育長 門 倉 節 明

例 言

- 1 本書は、狭山市沢1120番地1に所在する天岑寺墓所に累代の墓石を有する旗本小笠原家の調査報告書である。
- 2 本調査は、狭山市の委託により狭山楽史会（代表 佐々木恒久）が受託したものである。
- 3 調査の期間および担当者
 - (1) 墓石拓本調査 期間：平成17年10月1日～平成18年2月
担当者：井野典治、小川清、木下スエ子、佐々木恒久、笹本令子
佐藤芳子（文化財保護審議会委員）、嶋宮慈子、墨谷脩、永島せつ子
中込利男（文化財保護審議会委員）、蜂谷進、中内丈夫（文化財保護審議会副委員長）
 - (2) 聞き取り調査 期間：平成18年4月11日～平成18年8月24日
担当者：佐々木恒久、佐藤芳子、中内丈夫、若尾茂
 - (3) 牧之原調査 期間：平成18年9月28日～平成18年9月29日
担当者：小川清、佐々木恒久、佐藤芳子、塩田礼市、墨谷脩、中内丈夫
若尾茂（以上狭山楽史会会員）末吉隆（社会教育課）
- 4 報告書担当
執筆 本文を全体にわたり佐藤芳子が担当し、本文中の考察部分の中内丈夫が担当した。
編集 佐藤芳子、中内丈夫、佐々木恒久、末吉隆
口絵 池原昭治（文化財保護審議会委員）
系図・表作成 村越正治、佐藤芳子
写真撮影 若尾茂、村越正治、佐藤芳子、末吉隆
調査事務局 狭山市教育委員会社会教育課
- 5 調査および報告書作成にあたり、下記の諸機関および方々から資料提供やご教示・ご協力を賜った。厚く感謝の意を表する。（敬称略、順不同）
天岑寺、伴野義広（愛知県幡豆町歴史民俗資料館）、石川静男（幡豆町文化財保護委員）、茨城県桜川市歴史民俗資料館、静岡県島田市役所、島田市立博物館、島田市お茶の郷博物館、島田市立金谷図書館、静岡県牧之原市役所、牧之原神社、種月院、長光寺、法光寺、二条城事務局、向笠裕、山本佳延（以上牧之原神社関係者）、塚本昭一（島田市郷土歴史研究家）、大草省吾（牧之原開拓幕臣子孫の会会長）、前田匡一郎（静岡市旧幕臣研究家）、指田套一、中島国雄、横山茂樹、若宮英生（以上峯愛宕神社関係者）、安藤成一、大野幸一、粕谷仁一郎、細田治郎吉、横田武史（以上田中稲荷神社関係者）、横田泰宏（小笠原家文書所有者）、狭山市立博物館

目 次

序	
例言	
はじめに	1
I 小笠原家の概要	2
II 小笠原家の墓所	4
1 墓石の配置	4
(1) 現在の墓石配置図	5
(2) 明治 22 年の墓石配置図	6
(3) 墓石の配置についての考察	7
2 墓石の人物と石灯籠	9
3 墓石一覧表	26
4 墓石系図	28
5 墓石系図の考察	29
III 旗本としての小笠原家	30
1 旗本とは	30
2 小笠原家の知行地	31
3 役職	32
4 どのような生活をしていたか	32
5 江戸の屋敷	33
IV 領主としての小笠原家	37
1 小笠原家の知行地（領地）	37
2 小笠原家と寺社	38
3 現地の調査をとおして	43
V 徳川幕府崩壊後の小笠原家	44
1 墓石を求めて－12 代当主廣善－	44
2 刀を鋤に替えて－13 代当主廣直－	45
3 小笠原家の終焉－14 代当主・15 代当主－	48
VI まとめ	49
資料編	51
「墓石写真」	52
「墓石銘文一覧表」	54
おわりに	64

はじめに

寛永初期の創建当時そのままの姿を伝える天岑寺の惣門をくぐると、右手に阿弥陀如来の石像が迎えてくれる。広い境内には観音菩薩や六地蔵、石の船に乗った岩船地蔵や月待供養の板碑など石仏が多い。

本堂左側の小道を進むと歴代住職の墓石（無縫搭）が並び、その右側の木立に囲まれた一画が狭山市指定文化財の旗本小笠原家墓所である。

奥正面に2基の宝篋印塔があり、それを中心に38基の墓石がコの字状に整然と並ぶ。

宝篋印塔は、狭山市の地に新たな小笠原家を開いた初代小笠原安勝とその父安元の墓石であるが、その他は誰の墓石であるのか分らない。歴代当主についても、8代廣保までは「狭山市史」にあるが、それ以降の記載はみられない。

天正18年（1590）、狭山市の地に領地を賜り、幕末までの270年余、沢の天岑寺を菩提寺とした旗本小笠原家について、次の4点から調査を行い、小笠原家歴代当主をはじめ、その家族の全容を解明することにした。



天岑寺の惣門

- 1 天岑寺の小笠原家墓所について、38基の墓石と5基の石造遺物のすべてを拓本にとり、解説、分析し、「寛政重修諸家譜」や天岑寺所有の文書などと照合しながら、各墓石の人物とそれぞれの関係を明らかにする。
- 2 旗本としての小笠原家について、「寛政重修諸家譜」、「江戸幕府旗本人名辞典」、「江戸絵地図」などをもとに、歴代当主の職歴、江戸での生活を明らかにする。
- 3 領主としての小笠原家について、知行地（沢、田中、峯）に残る寺社、文書、伝承などを通して、領主と知行地との関係を明らかにする。
- 4 幕府崩壊後の小笠原家について、移住先である静岡県島田市および牧之原市の調査を行い、彼の地に眠る江戸時代最後の当主12代廣善の墓石と生涯、さらにその末裔を明らかにする。

1年以上に及ぶ調査の結果、小笠原家は天正18年（1590）から昭和12年（1937）まで、347年間続いたことが判明したので、ここに報告をする。

「寛政重修諸家譜」とは

徳川幕府が寛政11年（1799）から13年かけて編纂したもので、1530巻から成っている。小笠原安勝は巻第二百二「清和源氏・義光流・小笠原支流」に記載されているが、8代当主廣保の途中で終了。本書では、略して「寛政譜」と記した。

I 小笠原家の概要

戦国武士の小笠原太郎左衛門安勝は、天正 18 年（1590）徳川家康の関東入国に伴い、武蔵国入間郡に田中村・沢村・峯村（現在の狭山市狭山周辺）に 450 石（資料により 440 石～490 石）の領地を賜った。

文禄 3 年（1594）、安勝は三河国幡豆郡開戸村の安泰寺に葬られていた父・安元の菩提を弔うために沢村に寺を建て、安元の法名である天岑院殿紹恩居士から「天岑寺」と命名し、父の遺骨を幡豆の安泰寺から天岑寺に改葬した。

狭山の小笠原家は、入間郡以外にも茨城郡、真壁郡などに領地を賜り、1190 石の旗本として將軍の住む江戸城に近い番町や深川の武家屋敷に住んでいたが、代々の当主は天岑寺を菩提寺として墓を建立してきた。しかし、慶応 3 年（1867）10 月將軍慶喜は大政奉還、翌慶応 4 年 1 月鳥羽伏見の戦、4 月江戸開城、9 月明治改元となり、それ以降の狭山の小笠原家については、全く行方が不明だった。

狭山の旗本小笠原家の祖について

日本全国に数多く存在する小笠原家について簡単に説明すると、清和源氏の流れで、新羅三郎義光（八幡太郎義家の弟）を祖とする甲斐源氏の系統になる。

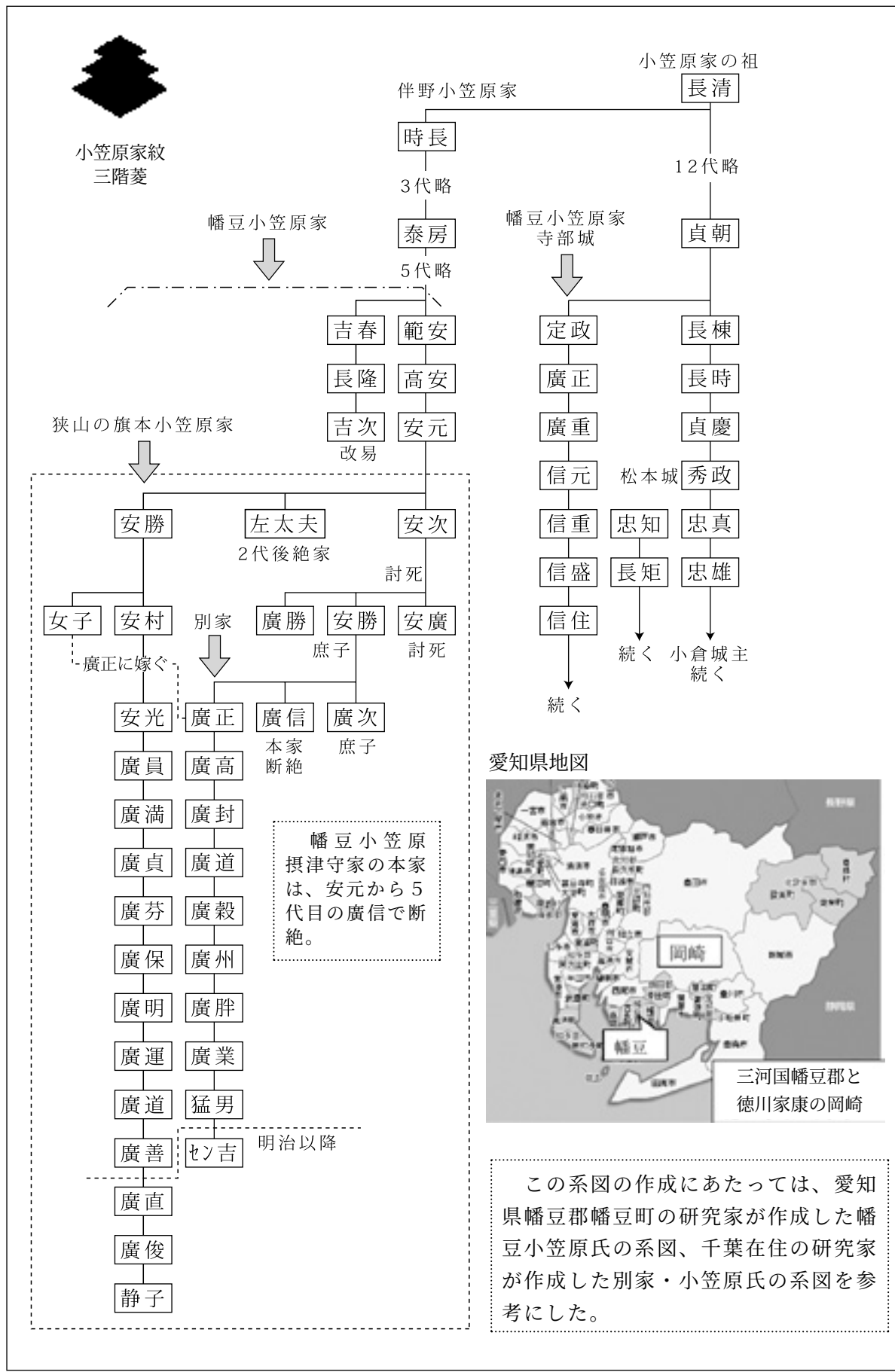
義光より数えて 4 代目の加賀美遠光^{かがみとおみつ}という人物の次男・長清が中巨摩郡小笠村（現在の山梨県南アルプス市）に居を構えた。その時に第 80 代高倉天皇から小笠原姓を名乗ることを許されて小笠原家が誕生した。長清の 6 男・伴野小笠原時長の子孫が三河国幡豆郡に住みつき幡豆小笠原摂津守家の祖となった。

幡豆小笠原家について

戦国時代、三河国幡豆郡には、寺部城の安芸守家と欠城^{かけ}（別名磯城^{いそ}）の摂津守家があり、太郎左衛門安勝の父・摂津守安元は欠城の城主だった。安芸守家では寺部城主初代定政の孫廣重が摂津守安元の娘を娶っている。安元は、はじめ今川氏の配下だったが、永禄 3 年（1560）、今川義元が桶狭間で織田信長に討たれ、徳川家康が岡崎にもどったので家康の配下となった。安元は家康から旧領を安堵され、後に戦功あって 3 村賜ったが、払った犠牲も大きかった。特に元亀 3 年（1572）の三方原の戦いでは、家康側が大敗し、安元も弟や嫡孫の他に一族郎党 7 名が討死し、多くの兵が戦傷を負って甚大な損害を受けてしまった。

悲運にも嫡男安次も天正 10 年（1582）北条との戦いで討死したが、3 男の太郎左衛門安勝は家康の近侍として戦功をあげ認められていった。摂津守本家は安元から 5 代目の廣信が天和 2 年（1682）に没して絶えたが、別家を興した廣信の弟・小笠原廣正に安勝の娘を嫁がせ、両家は昭和まで続いた。

狭山の旗本小笠原家の祖から昭和までの系図

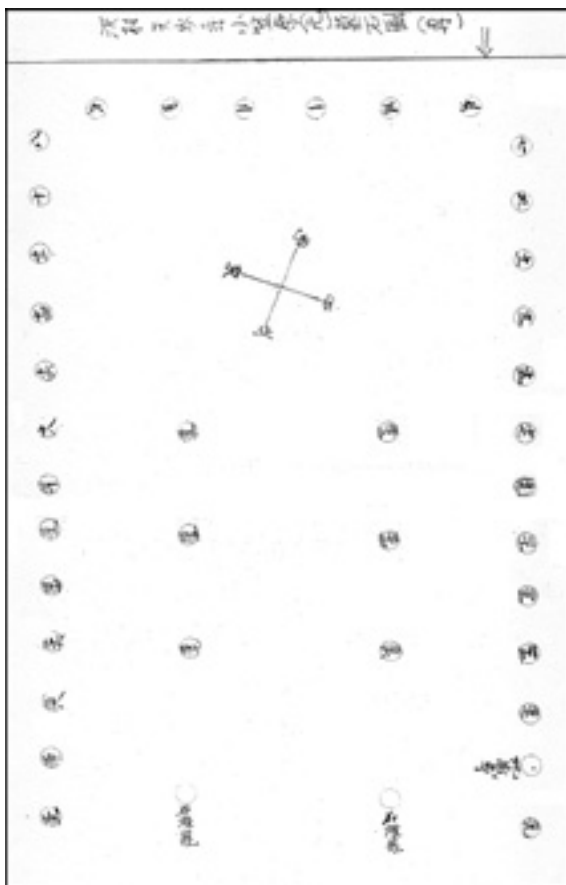


Ⅱ 小笠原家の墓所

1 墓石の配置

天岑寺の墓所には、奥正面の宝篋印塔を中心にコの字型に並んだ 38 基の墓石と 4 基の石灯籠、1 基の手洗石がある。ところが天岑寺には、明治 22 年に調査をした時に作成されたと思われる墓石配置図（図 1）がある。それによると現在のコの字状の内側にさらに 3 基ずつ 2 列に墓石が配置されていたことがわかる。

沢村天岑寺小笠原家墓石図（図 1）



- ・ 墓所の奥正面に並ぶ 6 基の墓石は、安勝の父安元の墓石に㊦、安勝の墓石に㊦と漢数字で番号がつけられ、さらに右から左へと順に番号が付されている。
- ・ 両サイドに並ぶ墓石の列も右→左、右→左へと番号が付されている。
- ・ 内側に配置された 6 基の墓石も右側の奥から順に右→左へと番号が付されている。
- ・ 今回の調査においても、この順に右→左へと番号を付け、墓石番号とした。

昭和 30 年代の墓石写真
（配置替え以前の墓所）

昭和 53 年（1978）狭山市
教育委員会発行の『狭山の文
化財』より転写



(1) 現在の墓石配置図

調査で判明した人物を墓石に当てはめて再現した。(図2)



注 小笠原家とは関係ない石塔

(2) 明治 22 年の墓石配置図 (配置替えする前の配置図)

(図 1) に当主名、家族名を入れて再現した。

(図 3)



（３）墓石の配置についての考察

「現在の墓石配置図」と「明治22年の配置図」を比べながら考察する。

歴代当主

小笠原家の墓所には、初代安勝から11代廣道まで、江戸時代を通して歴代当主の墓石がある。12代廣善については、墓石はないが当知行地に廣善の花押と捺印のある文書があり、10代廣運の墓石の右側面に「天保九年八月八日 小笠原廣善建之」と刻んである。また生後2ヵ月で亡くなった廣善の娘「晴」の墓石があることなどから、幕末に12代当主として、当地を知行していたことは間違いない。廣善の詳細については「幕府崩壊後の小笠原家」で述べる。

初代安勝と父安元の墓石は、墓所の奥正面に、そして2代安村から7代廣^{ひろよし}芬までは、向かって左の列に並んでいる。ところが8代廣保のときに右側に移る。10代、11代も右側の墓所入り口から近いところに配置されている。8代以降の墓石配置は、それ以前の配置に比べて墓石間のつながりがはっきりしない。

現在の墓石配置はコの字状になっているが、明治22年の配置図では、内側にさらに3基ずつ2列に配置されていた。そしてそこには8代廣保、10代廣運、11代廣道が右の列に、9代廣明と廣明の兄廣^{ひろます}胖、そしてもう1基（不明）が左側に配置されている。その一画には8代から11代の当主の墓石が集まり、あたかも8代当主廣保一家の墓地の感を呈していた。

その後墓所の整理があり、内側の墓石がそれぞれの後ろの列に移され、今のコの字型の配置になった。住職によると、内側の6基の墓石が傾いたり、笠の部分が落ちそうになり、危険なために左右両サイドに配置替えをしたとのことである。

当主の妻

初代安勝と父安元、2代安村の妻の墓石は、それぞれの当主の隣に配置されている。4代廣^{ひろかず}員から9代廣明の妻は、当主と同じ墓石に刻まれ、夫婦が1石の墓石である。8代廣保の墓石には、当主、妻、妾の3人の戒名が一緒に刻まれている。

1石の墓石に夫婦の戒名を刻む墓石は、小笠原家の墓石に限ったことではなく、江戸時代には多くみられ、農家の墓地でもよくみかける。

3代安光には先妻、後妻、そして側室がいたが、いずれの墓石も安光の墓石とは反対側の列に配置されていて、その配置も不自然である。10代廣運と11代廣道の妻の墓石は見あたらない。幕府が崩壊し、12代当主廣善が將軍警衛として江戸を離れ、静岡に居住したが、そのとき行動をともにして江戸を離れたためとも考えられる。

側室について

8代当主廣保（墓石番号23）には、当主の廣保・妻・妾の戒名が並んで刻まれている。本妻の場合は、墓石に〇〇妻と刻まれているが、墓石番号（9、17、26）には、それぞれの墓石の側面に「安村母」、「小笠原長三郎母」、「小笠原廣直母」と刻まれているので側室の墓石と推定される。また、8代当主廣保の側室は、今のところ実証するものがなく推定でしかないが、11代廣道の生母と考えられる。

当時は、世継ぎを得るために当主が側室を持つのは、あたりまえのことであったが、側室はあくまでも側室で家族ではなかった。多くはその墓所にも入れてもらえなかったと思われる。ところが上記の側室の墓石は、当主やその妻と同様の笠付角柱型の墓石で、大きさも同じである。さらに戒名も本妻と同じ〇〇院殿〇〇大姉をもらっている。8代当主の側室においては、当主・妻と一緒に墓石に刻まれているのである。これらの墓石は、側室であっても男子をもうけ、特にその子が当主になれば、大きな権力を持つことができたことを示している。

しかし、側室はあくまでも側室で、正妻とは区別されていた。正妻（先妻）は、その墓石が当主の隣に配置されるなり、当主と同一の墓石に並んで刻まれているが、側室の墓石は、当主と別の所に置かれた。また、8代当主の側室は当主とその妻と並んで刻まれているが、わざわざ「妾」とことわり書きがされている。

8代將軍吉宗の享保の改革以降、特に身分制が厳しくなり、正妻と側室の身分の違いを明確にするようになったことと関係があるのではないかと推測される。

その他

小笠原家の墓所に配置されている墓石は、そのほとんどが〇〇院殿〇〇居士（大姉）の戒名をもつ笠付角柱型の墓石である。その中にあって、墓所の端（入り口近く）に、「舟型光背付地蔵」や「板碑型の墓石」、「笠付角柱型墓石だが極端に小さな墓石」、「院殿居士でなく〇〇信士（信女）の墓石」がある。これらの墓石には、それぞれ謎があり、わからないことが多い。



地藏墓石の戒名



板碑型墓石の戒名



笠付角柱型墓石(小)
不詳女性の戒名

2 墓石の人物と石灯籠

拓本から判明した銘文などを中心に、墓石番号1から43までを簡単にまとめた。38基の墓石には、全部で49名の戒名が刻んであり、男性が23名、女性が26名と女性のほうが多い。当主の略歴は、寛政譜を参考にした。

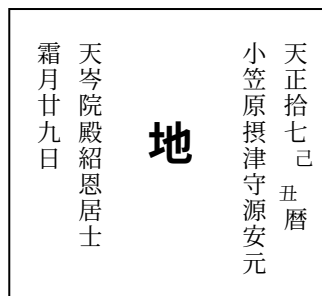
墓石番号1（宝篋印塔型墓石）

摂津守安元 初代当主安勝の父 天正17年（1589）没

戦国時代を懸命に生きてきた武将である。

はじめは今川氏の配下で三河国幡豆郡欠城だったが、後に同じ三河国に領地を持つ徳川家康の配下となった。次々と戦功をあげ家康の信頼を得て、新領地と家康の「康」の字を賜る。安元には、嫡子の安次（北条との戦いで討死）、2男某氏（別家となるが子孫は絶家）、3男で家康の近侍だった太郎左衛門安勝、寺部城主の小笠原廣重に嫁いだ娘がいた。

安元は三河国幡豆郡開戸村に安泰寺を開基したといわれ、現在も幡豆安泰寺には安元の位牌が祀られている。



安元の宝篋印塔銘文



初代安勝

初代の父安元

安元の略歴

- ・永禄6年（1563）54歳 徳川家康の配下となり、三河の一向一揆が起きた時、安元は三河国欠城（磯城）を守り、翌年家康に拝謁して幡豆郡の所領安堵の書付を賜る。
- ・永禄11年（1568）59歳 戦功あって三河国赤羽根・赤澤・蘆の3村を賜る。
- ・元亀3年（1572）63歳 三方原の戦で、弟や孫、家臣7名を失う。
- ・天正10年（1582）73歳 長男の安次が伊豆三島にて北条との戦で討死。孫の廣勝に本家を継がせる。
- ・天正17年（1589）80歳 没。安元が開基した安泰寺に葬られたが、文禄3年（1594）3男の安勝により武蔵国入間郡沢村の天岑寺に改葬され、立派な宝篋印塔が造立された。

墓石番号2 (宝篋印塔型墓石)

初代当主 太郎左衛門安勝 幼名は喜三郎

寛永18年(1641) 没

安勝は、安元の三男だが家康の近侍として功名をあげていたので、本家とは別に、武蔵国入間郡（現在の狭山市狭山周辺）に采地（領地）450石を賜り、新たに家を興した。天岑寺を菩提寺とした小笠原家の祖である。

安勝は天文18年(1549)三河国幡豆郡で生まれた。安元と母某氏（墓石番号3）の間に生まれた3男で、父の安元が40歳の時に生まれた。

姉は同族幡豆小笠原家の安芸守重廣に嫁いでいる。

妻と側室（安村の母）がいた。

安勝の略歴

- ・ 永禄12年(1569) 20歳 遠江国掛川の城を攻めたとき家康に従う。
近江國小谷攻め、三河国長篠の戦、長久手等の戦で名をあげる。
- ・ 天正10年(1582) 33歳 長兄・安次が討死する。
- ・ 天正17年(1589) 40歳 父安元が80歳で没。幡豆郡安泰寺に葬る。
- ・ 天正18年(1590) 41歳 家康の関東入国に伴って、武蔵国入間郡に領地450石を賜る。小笠原家の初代当主となる。
- ・ 文禄3年(1594) 45歳 領地の沢村に一寺を開基。父の法名である天岑院殿紹恩居士にちなんで「天岑寺」と命名し、安元の遺骨を三河国の安泰寺から改葬する。
- ・ 寛永4年(1627) 78歳 安村が大番となったので、この時に家督を譲ったと推定される。在任年数は約37年。
- ・ 寛永18年(1641) 92歳 没。菩提寺の天岑寺に葬られた。この時、天岑寺には七堂伽藍が揃っていたと伝えられる。



安勝の墓石拓本

墓石番号3 (笠付角柱型墓石 大型)

安元の妻 没年不詳

墓石左側面に「小笠原摂津守安本妻」と刻まれている。墓石には「安本」と刻まれているが「安元」のこと。この女性には、なぜか没年が刻まれていない。

安元の宝篋印塔の右側に寄り添うように建てられている。

墓石番号 4 （笠付角柱型墓石 大型）

安勝の妻 寛永 8 年（1631）没

墓石左側面に「小笠原太郎左衛門尉安勝妻」と刻まれ、安勝の宝篋印塔の左側に並んで建てられている。

安勝夫妻の左隣には、安勝と同じ幼名をもつ「喜三郎」と刻まれた墓石があるが没年は不明。

嫡子だったと思われる。

2 代目安村は、本妻の子ではなく側室の子。



安勝と妻の墓石

墓石番号 5 （笠付角柱型墓石 大型）

安勝の娘 没年不詳

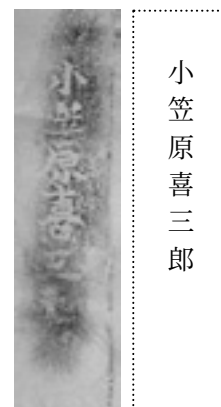
墓石には戒名「法蓮禪定尼」と刻まれ、年齢、没年とも不明。

墓石番号 6 （笠付角柱型墓石 大型）

安勝の子 没年不詳

墓石左側面に「小笠原喜三郎」と刻まれている。

安勝の幼名・喜三郎をもらっているのです、安勝の嫡子と思われる。安村より先に没したと推測される。



墓石左側面

墓石番号 7 （笠付角柱型墓石 大型）

安勝の子 明暦 3 年（1657）没

墓石には戒名のみが刻まれている。詳細は不明。

墓石番号 8 （笠付角柱型墓石 大型）

2 代当主 太郎左衛門安村 貞享 4 年（1687）没

慶長 10 年（1605）に、父の安勝が 56 歳の時に 3 男として生まれる。母は安勝の側室であった。戦場で戦ってきた父・安勝と異なり、世の中が落ち着いてから生まれた。兄 2 人は安村より先に没した。姉 2 人は旗本に嫁いているが、墓石は実家の天岑寺小笠原家墓所にある。

安村は小笠原家墓所の整備に力をいれた人物で、墓所には安村の名前が刻まれた多くの墓石や石灯籠などが設置されている。また、天岑寺へ祠堂金を出している。

先妻 遠山平大夫安重の娘（墓石番号 10）

後妻 松平勝左衛門昌吉の娘（墓石番号 15）



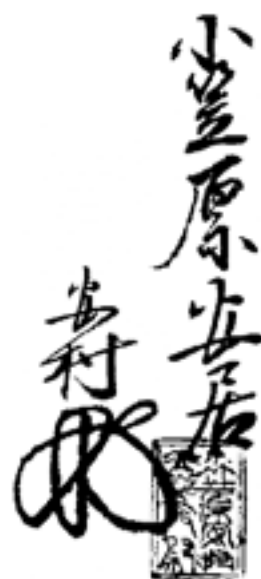
安村の墓石拓本

安村の略歴

- ・ 寛永2年（1625）20歳 将軍家光にお目見えする。
- ・ 寛永4年（1627）22歳 大番になり、^{りん}廩米200俵を賜る。
この頃家を継いだと推測される。
- ・ 寛永10年（1633）28歳 200石を加えられ、廩米を采地に納められる。
- ・ 寛永11年（1634）29歳 先妻没する。
- ・ 寛永15年（1638）33歳 実母没する。
- ・ 寛永18年（1641）36歳 父安勝が没する。
- ・ 承応2年（1653）48歳 後妻が没する。
- ・ 承応3年（1654）49歳 組頭となる。
- ・ 寛文5年（1665）60歳 御留守居番となる。
300俵加増、^{ほい}布衣を許される。
- ・ 天和元年（1681）76歳 職を辞する。
- ・ 天和2年（1682）77歳 安光に家督を譲る。在位年数は約55年。
養老米250俵を賜る。
- ・ 貞享3年（1686）81歳 天岑寺に祠堂金35両を出す。
- ・ 貞享4年（1687）82歳 没。

初代安勝から家督を継いだ年は文書に見いだせないが、寛政譜に「寛永4年（1627）大番となり、後廩米二百俵をたまひ、そののち家を継ぐ、これまでの廩米をあはせ賜ふ」とあるので、この頃に家督を継いだと推定される。

安村は49歳で組頭になり60歳のときに布衣を許された。布衣とは右図のような麻製の式服である。幕府がつくった六位相当の無位無官の格席を表している。旗本で布衣を許されたことは、格が一段と上がったことになる。



安村の署名と花押



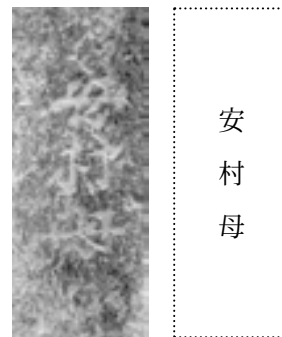
ほい
布衣

墓石番号9（笠付角柱型墓石 大型）

安勝の側室 安村の母 寛永15年（1638）没
墓石左側面に「安村母」と刻まれている。

寛政譜に某氏と書かれているだけだが、墓石調査によって、安勝の側室であることが判明した。

側室ではあるが、当主と同じ大型の笠付角柱型墓石が建てられている。



墓石の左側面

墓石番号 10 （笠付角柱型墓石 大型）

安村の先妻 遠山平大夫安重の娘 寛永 11 年（1634）没

墓石の位置は、安村と安光の間にあり、墓石左側面に「安村妻」と刻まれている。墓石番号 15 も同様に「安村妻」と刻まれているが、墓石番号 10 の没年が早いので安村の先妻で旗本遠山平大夫安重の娘と判断した。

墓石番号 11 （笠付角柱型墓石 大型）

安勝の娘 小笠原廣正の妻 貞享 2 年（1685）没

墓石右側面に「小笠原十右衛門母」と刻まれている。

摂津守安元直系の小笠原家本家は、5 代・新九郎廣信が元和 6 年（1620）に没したため、お家断絶となってしまった。しかし弟の廣正が別家を興して、下野国都賀郡に領地 500 石を賜った。安勝の娘は、別家を興した幡豆小笠原家本家筋の小笠原廣正に嫁ぎ、十右衛門廣高を生んだ。夫の廣正は 58 歳で没し、子の十右衛門廣高が 12 歳で家を継いだ。

母である彼女は、夫の没後 27 年間も長生きした。墓石が天岑寺にあるので、夫の没後は実家に戻って暮らし、安村が丁重に葬ったと思われる。

墓石番号 12 （笠付角柱型墓石 大型）

3 代当主 太郎左衛門安光 元禄 2 年（1689）没

寛政譜には没した時の年齢が記されていないために、年齢を特定することができない当主である。安光の母は墓石の位置や没年を考えると、安村の先妻（墓石番号 10）であると思われる。

他の当主が 20 歳代で大番になっているので、安光も 20 歳代で大番になったと推測される。父安村から家督を継いで約 7 年後、父が没してから 2 年後に亡くなった。

先妻 永見権七郎重時の娘（墓石番号 25）

後妻 大久保勘三郎忠行の娘（墓石番号 19）

側室 小笠原長三郎の母（墓石番号 17）

安光の略歴

- ・ 正保 4 年（1647） 大番となる。廩米 200 俵を賜る。
- ・ 寛文 7 年（1667） 新番となる。
- ・ 寛文 8 年（1668） 50 俵を加えられる。
- ・ 天和 2 年（1682） 家督を継ぐ。
- ・ 元禄元年（1688） 徳林寺に釈迦涅槃図を寄贈する。
- ・ 元禄 2 年（1689） 没。在位年数は約 7 年。



安光の墓石拓本

安光の父・安村は天和元年（1681）76歳まで役職を勤め、翌年安光に家督を譲ったが、82歳まで長生きした。父の威光の前に埋もれてしまった観がある。

墓石番号 13 （笠付角柱型墓石 大型）

安勝の娘 旗本前嶋十三郎の妻 明暦3年（1657）没

墓石左側面に「前嶋十三郎妻」と刻まれている。旗本の前嶋十三郎重正に嫁ぎ、十左衛門重勝を生んでいるが明暦3年（1657）に没し、天岑寺に葬られた。

十三郎との間に生まれた嫡子・十左衛門の墓（墓石番号 18）も天岑寺にある。

十左衛門は前島家の嫡子なので、四谷にある前嶋家の菩提寺・全勝寺へ調査に行った。しかし、昭和20年の東京大空襲のため過去帳は焼失し、残された前島家の墓石は1基だけ残されていたが、戒名が削り取られて「前嶋家之墓」と刻まれていた。前島家母子2人の墓がなぜ天岑寺にあるのか不明であるが、2人が没したとき、安村は生存していたので、実家が墓石を建てたと推測される。

墓石番号 14 （笠付角柱型墓石 大型）

4代当主傳四郎廣員^{ひろかず} 享保18年（1733）没

廣員の妻 板橋與五左衛門季盛の娘 宝暦3年（1753）没

初代から3代までは、当主と妻は別々の墓石に葬られていたが、4代当主の廣員から、一石に夫婦2人の戒名が並んで刻まれるようになった。

墓石右側面には「小笠原傳四郎廣員」と刻まれている。

寛政譜には、廣員の母は「竹田氏」とあるが、父安光の先妻、後妻のどちらとも異なるため、安光の側室と考えざるを得ない。しかし、庶子の場合は通常「母は某氏」と書く寛政譜の記載方法と一致しない。

廣員の略歴

- ・天和2年（1682）20歳 將軍綱吉に拝謁する。
- ・天和3年（1683）21歳 大番となる。
- ・元禄2年（1689）27歳 遺跡（父没後の家督）を継ぐ。
- ・元禄9年（1696）34歳 新番に移る。黄金2枚を賜る。
- ・元禄10年（1697）35歳 廩米300俵を改め、常陸国真壁郡と茨城郡に采地を賜る。
8月桐間番に転ずる。
- ・元禄12年（1699）37歳 3月小納戸、4月新番に復すも後に番役を辞して小普請となる。
- ・正徳2年（1712）50歳 致仕（退任）して家督を廣満へ譲る。在位年数は約23年。



廣員夫妻の墓石拓本

- ・享保8年（1723）61歳 嫡子の廣満が没したために、側室が生んだ5男の廣貞を6代当主にした。
- ・享保18年（1733）71歳 没。致仕（辞任）後、21年も長生きして小笠原家を見守った。

墓石番号 15 （笠付角柱型墓石 大型）

安村の後妻・松平勝左衛門昌吉の娘 承応2年（1653）没

墓石左側面に「安村妻」と刻まれている。没年より安村の後妻と判断した。

墓石番号 16 （笠付角柱型墓石 大型）

5代当主 太郎左衛門廣満 享保8年（1723）没

廣満の妻 岩井傳左衛門の娘 宝暦8年（1758）没

墓石には夫婦2人の戒名が並んで刻まれ、墓石右側に「俗名 小笠原太郎衛門廣満事」と刻まれている。

母は板橋與五左衛門季盛の娘、父の廣員が20歳の時の嫡子。

廣満の略歴

- ・元禄4年（1691）9歳 将軍綱吉にお目見えする
- ・正徳2年（1712）30歳 家督を継ぐ。
- ・享保8年（1723）41歳 没。父より早世。

在位年数は11年。

活躍した父廣員に比べ無役で終わった。

妻は、松平山城守家臣の娘で、廣満が没してから35年も長生きした。墓石の紋を調べると左側に妻の実家紋、右側に小笠原家の三階菱紋が並べて刻んである。夫婦の家紋が刻んであるのは、この墓石だけで珍しい。



廣満の墓石にある家紋

墓石番号 17 （笠付角柱型墓石 大型）

安光の側室 小笠原長三郎の母 寛文6年（1666）没

墓石左側面に「小笠原長三郎母」と刻まれているが、寛政譜にはこの女性の記載がない。墓石の銘文より安光の側室と判断した。

この側室が生んだ安光の子長三郎については記録が残っていない。

墓石番号 18 （笠付角柱型墓石 大型）

安勝の孫 前嶋十左衛門 天和4年（1684）没

墓石左側面に「前嶋十左衛門」と刻まれている。前嶋十三郎重正に嫁いだ安勝の

娘（墓石番号 13）の嫡子。何故天岑寺に葬られているかは、四谷の全勝寺にある前嶋家の墓石を調べたが不詳。

墓石番号 19 （笠付角柱型墓石 大型）

安光の後妻 旗本大久保勘三郎忠行の娘 延宝 9 年（1681）没
年齢などは不詳。父の旗本大久保忠行は入間郡に領地を持っていた。

墓石番号 20 （笠付角柱型墓石 大型）

6 代当主 喜右衛門廣貞 延享 2 年（1745）没

廣貞の妻 安永 5 年（1776）没

廣貞は 4 代廣員の 5 男（庶子）

墓石は夫婦 2 人の戒名が並んで刻まれ、右側面に「俗名小笠原喜右衛門廣直」とある。

「廣直」とは「廣貞」のことである。

寛政譜では、母は廣員の本妻である板橋殿と記してあるが、生母は廣員の側室であることが調査によって判明した。

兄の 5 代廣満が嗣子なく没したため、兄の養子となり遺跡を継いで、6 代当主となった。

廣満と同様に無役。

妻は寛政譜に記載がないので出身は不明。

廣貞の略歴

- ・享保 8 年（1723）24 歳 遺跡を継ぐ。
- ・延享 2 年（1745）46 歳 没。

在位年数は約 22 年。



廣貞夫妻の墓石拓本

墓石番号 21 （笠付角柱型墓石 大型）

小笠原助五郎

小笠原傳蔵

没年は異なるが、6 代当主廣貞の子「助五郎」と「傳蔵」の 2 人が 1 石に刻まれている。7 代廣^{ひろよし}芬の弟にあたるが、何歳で没したのか、何をしていたのか不明。

正面に 2 人の戒名、両側面に名前と没年が刻まれている。

墓石の右側面は小笠原助五郎 宝暦 9 年（1759）没

墓石の左側面に小笠原傳蔵 宝暦 3 年（1753）没

墓石番号 22（笠付角柱型墓石 大型）

7 代当主 太郎左衛門^{ひろよし}廣芬 天明 6 年（1786）没

廣芬の妻 大岡数馬光義の娘 安永 3 年（1774）没

墓石正面には夫婦 2 人の戒名が並んで刻まれ、右側面に「廣芬」、左側面に「廣芬妻」と刻まれている。

廣芬には嗣子がなかったので、養子と養女に家を継がせた。そのために、天正 18 年（1590）から天明 6 年（1786）まで 196 年も続いた太郎左衛門安勝の血筋は 7 代廣芬で終わってしまったが、養子相続によって小笠原家は続いた。

廣芬は、田中稲荷神社や峯の愛宕神社を寄進して、知行地である田中村や峯村などに貢献した当主である。

廣芬の略歴

- ・延享 2 年（1745）19 歳 4 月に遺跡を継ぐ。
8 月に將軍吉宗にお目見えする。
- ・寛延元年（1748）22 歳 大番となる。
- ・寛延 2 年（1749）23 歳 安穩寺に定書を出す。
- ・寛延 3 年（1750）24 歳 田中村に田中稲荷神社を寄進。
- ・宝暦 7 年（1757）31 歳 峯村に愛宕神社を寄進する。
- ・宝暦 9 年（1759）33 歳 黄金 1 枚を賜る。
- ・宝暦 13 年（1763）37 歳 新番となる。
- ・天明 6 年（1786）60 歳 没。在位年数は約 41 年。



廣芬の署名と印

墓石番号 23（笠付角柱型墓石 大型）

8 代当主 太郎左衛門廣保 文化 5 年（1808）没

廣保の妻 大岡作左衛門義但の娘 文化 11 年（1814）没

廣保の妾 詳細は不明 天保 15 年（1844）没

墓石正面には夫、妻、妾 3 人の戒名が並んで刻まれている。

右側面の銘文には「當家七代小笠原廣芬の養子である太郎左衛門廣保は文化五戊辰年四月五日に没した。廣保の実父は小笠原数馬長儀。廣保は長儀の次男で、母は小笠原平八長賢の養女である」と記されている。

寛政譜は廣保が在任中の寛政年間で終わっているため、太郎左衛門の名前を継いで二条城で没した次男の^{ひろます}廣胖が 9 代目を継いだような印象を与える。

墓石左側には「小笠原廣保 妾」と刻まれている。なぜ妾と刻んだか詳しくは不明である。寛政譜によると、廣保には 8 人の子どもがいて、そのうち男子は 5 名いるので、本妻と妾の 2 人から生まれたものと推測される。

7 代当主廣芬に子がなかったため、廣保が養子として入った。廣保の妻もまた養女なので、小笠原家の血筋は廣芬の代で完全に途切れたが、養子と養女のお蔭で、

小笠原家は断絶することなく続いた。

廣保の略歴

- ・安永7年（1778）25歳 大番となる。
- ・天明6年（1786）33歳 遺跡を継ぐ。このとき領地は1190石。
騎射歩射の射手になり、将軍より物を賜る。
- ・享和2年（1802）49歳 大番として京都二条城の警衛についていた次男の廣胖が29歳の若さで没する。
- ・文化3年（1806）43歳 田中村用水争論の古文書に名前がでてくる。
- ・文化5年（1808）55歳 没。在位年数は約22年。

廣保の墓石銘文について

墓石正面に、当主・妻・妾の3人の戒名が刻んである。

右側面には廣保の生い立ちや没年が刻まれ、実父小笠原数馬長儀の次男あることがわかる。左側面に妾の没年が刻まれているが妻の没年は刻まれていない。

天保十五 甲辰年四月二十六日 小笠原廣保 妾	寛光院殿義峰立節居士 桂壽院殿婉室貞薫大姉 普明院殿心月妙照大姉	次男母同姓平八長賢養女 四月五日卒實小笠原数馬長儀 太郎左衛門廣保文化五戊辰年 當家七代小笠原廣芬養子同氏
---------------------------------	--	--

墓石左側面

正面

右側面



3名の戒名拓本



廣保の墓石

墓石番号 24 （笠付角柱型墓石 大型）

安村の娘 延宝2年（1674）没

墓石左側に「安村娘」と刻まれている。

未婚なのか何歳で没したのか、名前もわからないが、父安村の愛情が感じられる立派な墓石である。

墓石番号 25 （笠付角柱型墓石 大型）

安光の先妻 永見権七郎重時の娘 延宝2年（1674）没

墓石左側面に「傳三郎妻」と刻んである。傳三郎とは3代当主安光のこと。墓石番号19より先に没していること、寛政譜の記載により安光の先妻と判断した。

墓石番号 26 （笠付角柱型墓石 大型）

4代廣員の側室 6代廣貞の実母 寛延2年（1749）没

墓石右側面に「小笠原廣直実母」と刻まれている。

廣直とは廣貞のこと。

寛政譜には、6代廣貞の母は4代廣員の妻「板橋與五右衛門の娘」と記載してあるが、墓石調査によって判明した銘文から、この女性が廣直こと廣貞の実母であると判断した。

この側室の存在は、小笠原家にとって重要な意味がある。前述したように、廣員と本妻板橋殿の間に生まれた嫡子の5代当主廣満は40歳で没し、後継が生まれなかったので、側室が産んだ5男の廣貞を6代当主とした。廣貞没後は廣貞の嫡子廣芳が家を継いだ。息子が6代当主となり、孫が7代当主となったので側室としての役目は十分に果たしたことになる。

当主と同じ大きさの立派な墓石である。



正面の戒名



左側面の拓本

墓石番号 27 （笠付角柱型墓石 大型）

米津十兵衛の母 小笠原家の誰なのか不詳 正徳4年（1714）没

墓石右側に「米津十兵衛の母」と刻まれている。

『寛政譜』の「巻第十八 米津」によると、旗本・米津十兵衛は「某氏が男」で、米津家の養子となり大番や桐間番を務めた。遺跡を継いだ子「才兵衛」は延享3年（1746）不始末のため、追放された。

『寛政譜』では、不始末をした家系の武士は名前が記されず、「某」とだけ記載されている。

天岑寺資料に、安村後妻と記してあるが、墓所には「安村妻」と刻んだ墓石が2基あるので、後妻ではない。側室にしては年齢が離れすぎている。この立派な墓石の人物は、安村の娘が某氏に嫁ぎ、十兵衛を生んだのではないかと推測したが、確実な証拠は見つからなかった。



十兵衛母の墓石



右側拓本

残念ながら、「米津十兵衛の母」と小笠原家の関係が確認できないため、墓石は

系図の何処に位置するか不明である。安村が没してから 27 年目に没。

墓石番号 28 (笠付角柱型墓石 大型)

安村の孫 2 人 「童子」 延宝 2 年 (1674) 没
「童女」 延宝 3 年 (1675) 没

墓石裏側に「小笠原太郎左衛門尉安村孫」と刻まれている。裏側に銘文が刻んであるのはこの 1 基だけである。何故、この墓石だけ裏側面に刻んだのか不明。

また、安村の孫ではあるが、両親は誰なのかも不明。

なぜ親の名前を出さずに、安村の孫としたのか不思議である。

当主たちと同様の立派な笠付角柱型墓石である。

墓石番号 29 (笠付角柱型墓石 大型)

小笠原氏関係 3 人 (女性 2 人、男性 1 人) 3 人とも没年不詳

墓石には戒名しか刻んでいない。天岑寺の資料にも没年のみで、系図のどこに位置するのか不明である。「大姉」と「居士」なので成人の墓石。

墓石番号 30 (笠付角柱型墓石 大型)

小笠原長三郎 安光の側室の子 延宝元年 (1673) 没

長三郎については何歳で没したのか、何をしていたのか不詳。

墓石番号 31 (笠付角柱型墓石 中型)

10 代当主 長次郎廣運 天保 9 年 (1838) 没

天岑寺資料に、9 代廣明夫妻(墓石番号 34)は長次郎(長治郎、長二郎)の親であることが記載されている。

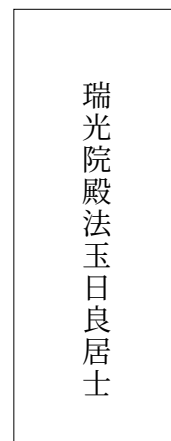
墓石右側面に、「天保九戊戌年八月八日 小笠原廣善建之」と刻まれている。

墓所には 12 代当主の墓石はないが 12 代当主として活躍していたことを示す貴重な資料の一つである。何年に当主の座についたのかは記録にないが、天岑寺に出した文政

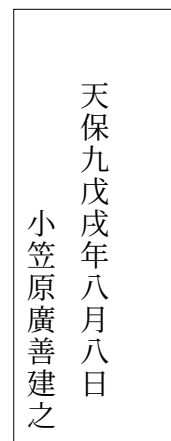
12 年 (1829) の壁書が現存するので、文政 12 年 (1829) に 10 代当主として



廣運の花押と印



墓石正面



右側面

家督を継いだと考えられる。家督を継承してから約9年後に没しているが、生前に家督を譲ることなく死去したのかは不明である。また、廣運を何と読むのかも不明である。在位年数は約9年。

墓石番号 32 （笠付角柱型墓石 大型）

太郎左衛門廣^{ひろ}胖^{ます} 8代当主廣保の次男 享和2年（1802）没

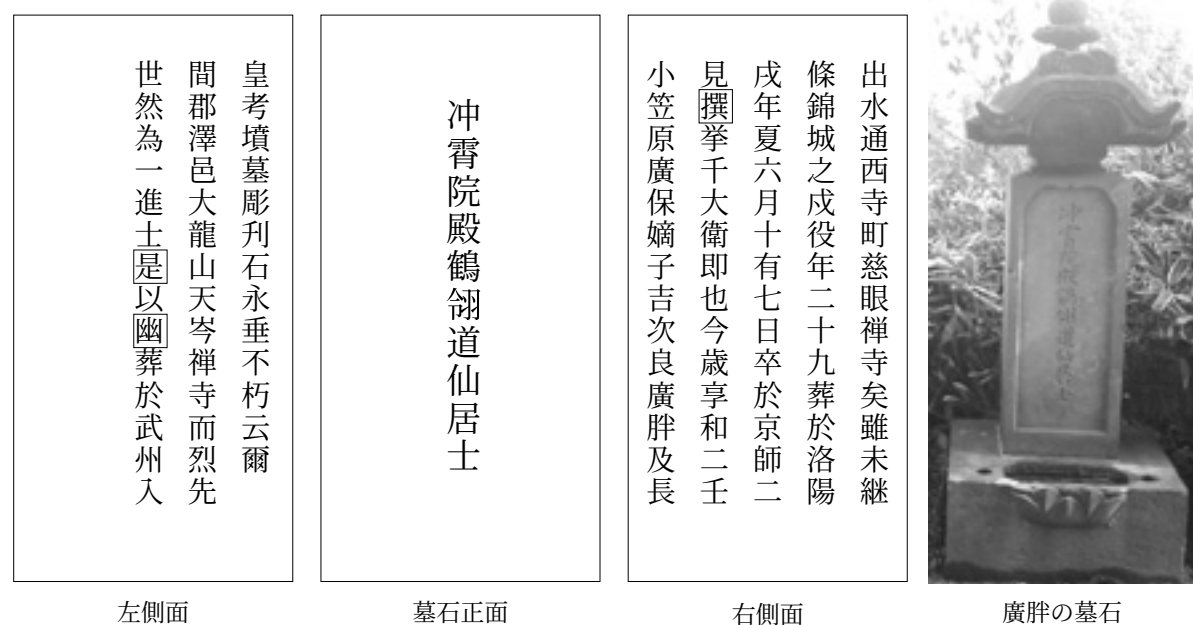
寛政譜によると「寛政2年（1790）將軍家にはじめてまみえたてまつり、寛政6年（1794）大番に列す」と記されているので、次期当主としての道を歩んでいたと想像される。しかし、実際には墓石に刻まれた銘文から、京都の二条城に大番として務めていたとき、29歳で家を継ぐことなく亡くなってしまった。京都の慈眼禅寺に葬られたが、後に天岑寺に改葬され先祖代々の列に加えられた。

二条城の勤務について

二条城の大手門を入ると、すぐ右側に江戸時代の番所が残っている。

徳川将軍が不在の二条城は、二条在番と呼ばれる江戸から派遣された大番組の武士によって警衛の全責任がとられていた。毎年2組（1組50人）が4月を期に交替して要所の番に当たった。

廣胖は大番組の武士として、江戸から京都へ行き、二条城の警備に当たっているときに没した。墓石からは、父廣保の嘆きが伝わってくるようである。



廣胖の墓石に刻まれた銘文によって、9代当主を明らかにすることができた。また、旗本大番役としての小笠原家を知る上でも貴重な墓石であった。

墓所では、大型笠付角柱型墓石は廣胖が最後で、以降は中型墓石となる。

墓石銘文解説

小笠原廣保の嫡子吉次郎廣胖は、将軍にまみえたてまつり推挙され大衛（大番）になるなり。今年、享和二年戌年の夏六月十七日京都二条城の警衛の役において死す。二十九歳 京都洛陽の出水通り西寺町の慈眼禅寺において葬儀を行う。いまだ家を継いでおらず、しからば一進士として入間郡澤邑の大龍山天岑寺において幽葬し、先祖の墓地に列する。以上のことを刊石^{かんせき}に彫り、ながく後世に残す。

※寛政譜によると廣胖は次男だが、長男が早世したので嫡子として育てられたと推定される。

天岑寺の小笠原家墓所調査の中で最も特質すべき墓石である。

墓石の正面は廣胖の戒名。左右の銘文はまず左から読み、次に左側の銘文を左から読むことで解明できた。

廣胖は、京都二条城の警備役にあったとき 29 歳で亡くなり、小笠原家の当主にはなれなかったが、官位の高い優れた士として天岑寺の先祖代々の墓地に葬られた。

墓石番号 33 （笠付角柱型墓石 中型）

11 代当主 政之丞廣道 天保 15 年（1844）没

8 代当主廣保の 5 男で、9 代当主廣明の弟。

10 代当主廣運の叔父にもなる。

天岑寺文書には太郎左衛門廣善の養父との記載がある。

天保 9 年（1838）から天保 12 年（1841）まで 3 年間当主だった。

廣運が天保 9 年（1838）に没したため、廣道は天保 12 年（1841）に廣善を養子に迎えるまでの 3 年足らずの間、急きょ「つなぎ役の当主」を務めたと推定される。

旗本は家を継ぐ人物がいない場合はお家断絶になる。

廣道の墓石銘文のなかに「不禄」の文字があり、最初は禄を持たない部屋住みの侍だと思っていたが、後になって「不禄」とは武士の死を意味する言葉とわかり、11 代当主だったことが判明した。

天保十五甲辰四月二十日
小笠原太郎左衛門廣保
五男
小笠原政之丞廣道
行年四十八歳不禄

墓石右側の銘文

墓石番号 34 （笠付角柱型墓石 中型）

9 代当主 傳四郎廣明（政次郎のこと） 天保 7 年（1836）没

廣明の妻 天保 5 年（1834）没

墓石には、夫婦の戒名が並んで刻まれている。

家督を継ぐはずだった兄^{ひろます}廣胖が、父廣保に先立って没したため、父の死去に伴って三男の廣明が文化5年（1808）に遺跡を継ぎ、9代当主となった。

本当主の名は、文化6年（1809）の田中村入会争論に政次郎の名前で出てくる。

文政10年（1827）の国字分名集に廣明こと小笠原傳四郎の名前と出身地、家紋、石高、屋敷の住所などの記載がある。また、この当主の墓石から中型笠付角柱型墓石に変化している。在位年数は約21年。



左側が9代廣明夫妻の墓石、右側は廣胖墓石

墓石番号 35 （舟形光背浮彫地藏墓石）

安光の子 田中村の善次郎 元禄12年（1699）没
寛政譜には、安光の子として「善次郎」の名が記載されている。しかし、他の墓石（笠付角柱型墓石）と異なり舟形光背浮彫地藏墓石で、しかも元禄12年に没したのに安置されている位置は墓所の右側配列の端から2番目である。

戒名は「直心見指信士」と刻んである。

なぜ地藏なのか

地藏には「田中村小笠原善次郎事」と刻まれているので、田中村に土着した人物ではないかと想像される。

3代当主安光の子が、なぜ田中村に土着したのか詳細は不明である。



舟型光背浮彫地藏

墓石番号 36 （笠付角柱型墓石 小型）

小笠原氏女性 不詳 宝暦9年（1759）没

墓石左側に「小笠原氏」と刻まれている小さな笠付角柱型墓石。戒名は「開室妙峯信女」と刻まれ小笠原家の女性ではあるが、系図の何処に位置するのか不明。

明治22年の墓石配置図では、8代当主廣保と向い合わせの位置に建立されているので、廣保との関係が考えられる墓石だ。

墓石番号 37 （板碑型墓石）

男性 不詳 延宝3年（1675）没

墓所の右側列の一番右端に建てられている墓石。なぜ1基だけ板碑型墓石なのか。誰の墓石なのか、小笠原家とのつながりなどは不明。墓石正面に「飯眞 青巖 宗徳信士 覺靈」と刻んである。

墓石番号 38 （笠付角柱型墓石 小型）

12 代当主廣善の娘 名前は晴 弘化 3 年（1846）没

この世に生を受けたが、
2 ヶ月で没してしまった。
女の子の名前は「晴」。
父親の 12 代当主廣善は、
小さいが旗本の娘らしい威厳
ある墓石を建てた。
戒名は「玉風妙姿禪童女」
残念ながら墓所には父母の
墓石はない。

弘化三歳次六月十九日出生
呼晴女同年八月十六日卒
小笠原廣善女



左側面の銘文

正面拓本

墓石の写真
高さ・97cm

墓石番号 39 （奥の左側にある石灯籠）

石灯籠 2 代当主、安村が延宝 4 年（1676）に奉納した。

この灯籠は 40 番とは対で奉納され、正面に石灯籠を寄進した意趣が刻まれている。

右意趣民農策作徳厚之天應被予己官煩何哀之粵
為寄附
六趣闇夜智火為燈示法燈求挑光慈尊欲迫朝者也 云

灯籠の銘文

右意趣は、民の農策作徳厚きの天に応じてたまわった
己の官職を煩い何でこれを哀れむか
ここに六道の闇夜に智の火を灯し法灯となし墓地の光
に大悲の仏を求め朝にいたるを欲する者なり
石灯籠

銘文の訳文

天岑寺小笠原家の 2 代当主安村によって延宝 4 年に奉納された一対の石灯籠のうち、向かって左側の灯籠に刻まれている文面とその訳文。

満ち足りた領民政策と己の栄達をなした安村の自尊の心とその奥にある悲しみ、あれこれ思い悩み石灯籠の灯火を法灯として仏の大悲に救いを求める安村の姿があった。



石灯籠の笠の四方に卍（まんじ）が刻まれている。卍は、仏に現れた吉祥万徳の印の表象といわれる。

墓石番号 40 （奥の右側にある石灯籠）

石灯籠

2代当主、安村が延宝4年（1676）に奉納

刻字が読み取りにくい、部分的に読める刻字から、39番と対で奉納したことがわかる。ただし、火袋、笠、宝珠の部分の形状は異なっている。

墓石番号 41 （入り口の左側にある石灯籠）

石灯籠

2代当主、安村が延宝2年（1674）に奉納。

墓石番号 42 （入り口の右側にある石灯籠）

石灯籠

2代当主、安村が延宝2年（1674）に奉納。

41、42の笠には、小笠原家の三階菱紋が刻まれている。



墓石番号 42 の石灯籠

墓石番号 43 （手洗石）

手洗石 2代当主、安村が貞享2年（1685）に奉納した。

「施主 小笠原安居」と刻まれている。

安居とは安村のこと。



手洗石

----- 笠付角柱型墓石の大きさについて -----



・笠付角柱型墓石の大きさは、一律ではない。しかし、大きく分けると、左の写真のように分類できる。

・詳細は、墓石一覧表のページに記載した。

3 墓石一覧表

No.	様 式	摘 要	没 年	
			年 号	西 暦
1	宝篋印塔	小笠原安元（初代当主父）	天正17年	1589
2	宝篋印塔	初代当主 小笠原安勝	寛永18年	1641
3	笠付角柱型墓石（大）	安元妻	——	——
4	笠付角柱型墓石（大）	安勝妻	寛永8年	1631
5	笠付角柱型墓石（大）	安勝娘（禪定尼）	——	——
6	〃	安勝の子（喜三郎）	——	——
7	〃	安勝の子	明暦3年	1657
8	〃	2代当主 小笠原安村	貞享4年	1687
9	〃	安勝側室（安村母）	寛永15年	1638
10	〃	安村先妻	寛永11年	1634
11	〃	安勝娘（十右衛門母）	貞享2年	1685
12	〃	3代当主 小笠原安光	元禄2年	1689
13	〃	安勝娘（前嶋十三郎妻）	明暦3年	1657
14	〃	4代当主 小笠原廣員 廣員妻	享保18年	1733
			宝暦3年	1753
15	〃	安村後妻）	承応2年	1653
16	〃	5代当主 小笠原廣満 廣満妻	享保8年	1723
			宝暦8年	1758
17	〃	安光側室（長三郎母）	寛文6年	1666
18	〃	安勝孫（前嶋十左衛門）	天和4年	1684
19	〃	安光後妻	延宝9年	1681
20	〃	6代当主 小笠原廣貞 廣貞妻	延享2年	1745
			安永5年	1776
21	〃	廣貞の子（助五郎） 廣貞の子（傳藏）	宝暦9年	1759
			宝暦3年	1753
22	〃	7代当主 小笠原廣芬 廣芬妻	天明6年	1786
			安永3年	1774
23	〃	8代目当主 廣保 廣保妻 廣保妾	文化5年	1808
			文化11年	1814
			天保15年	1844
24	〃	安村娘	延宝2年	1674
25	〃	安光先妻	延宝2年	1674
26	〃	小笠原廣直の実母	寛延2年	1749

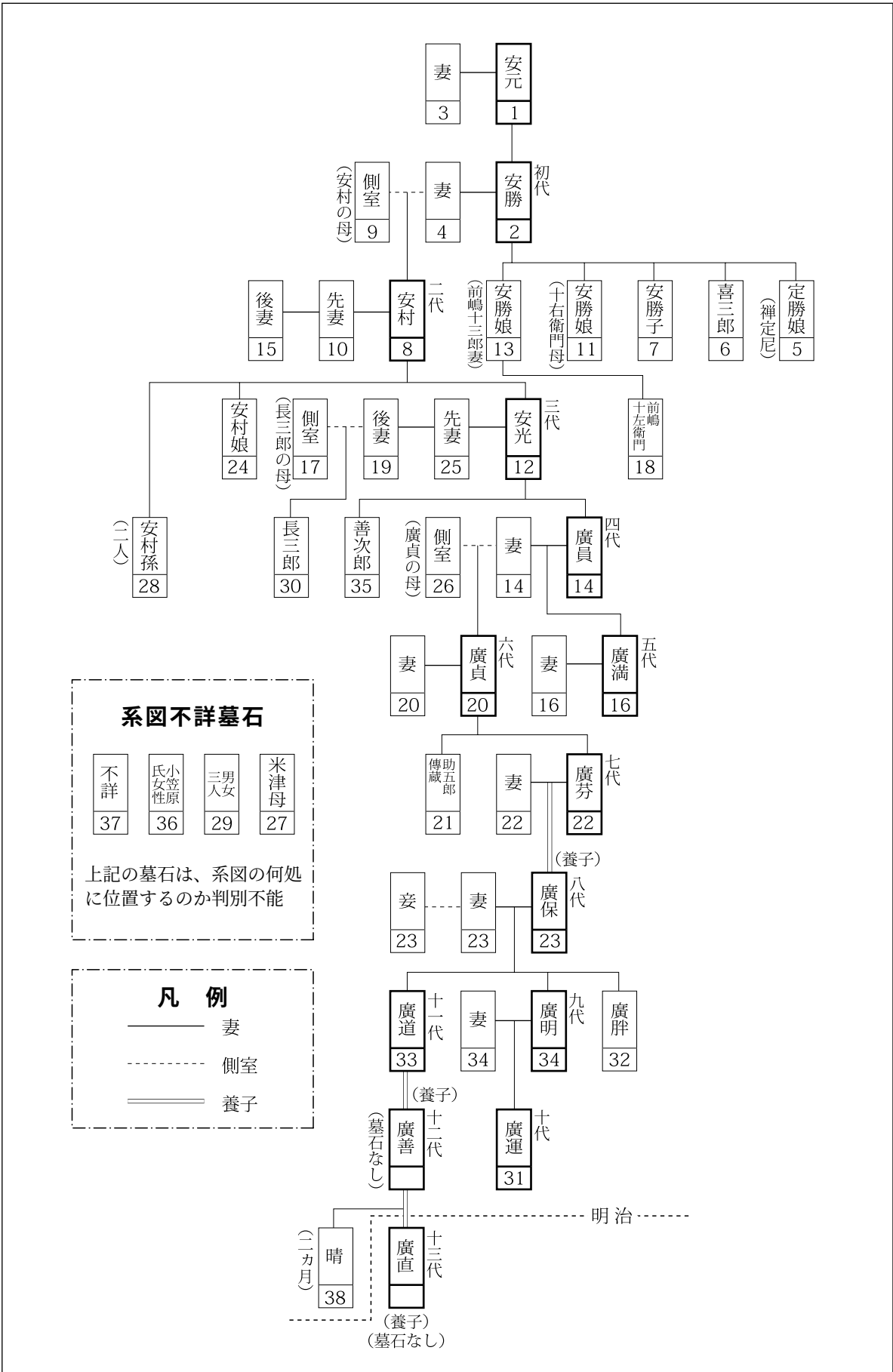
27	〃	米津十兵衛の母	正徳４年	1714
28	〃	安村孫（男子） 安村孫（女子）	延宝２年 延宝３年	1674 1675
29	〃	男性１名、女性２名	——	——
30	〃	安光の子（長三郎）	延宝元年	1673
31	笠付角柱型墓石（中）	10代当主 小笠原廣運	天保９年	1838
32	笠付角柱型墓石（大）	廣保の子（小笠原廣胖）	享和２年	1802
33	笠付角柱型墓石（中）	11代当主 小笠原廣道	天保15年	1844
34	笠付角柱型墓石（中）	9代当主 小笠原廣明 廣明妻	天保７年 天保５年	1836 1834
35	浮彫地藏	小笠原善次郎	元禄12年	1699
36	笠付角柱型墓石（小）	小笠原氏（女性）	宝暦９年	1759
37	板碑型墓石	（不詳男性）	延宝３年	1675
38	笠付角柱型墓石（小）	廣善娘（２ヵ月）	弘化３年	1846

	様式	造立者	造立年度	
39	灯籠	小笠原太郎左衛門尉安村	延宝４年	1676
40	〃	〃	〃	〃
41	〃	〃	延宝２年	1674
42	〃	〃	〃	〃
43	手水石	〃	貞享２年	1685

墓石の様式と高さ、基数の一覧

様式		墓石の高さ(cm)	基数
宝篋印塔	安元	262	1基
	安勝	245	1基
笠付角柱型	（大）	160～190	29基
	（中）	130～140	3基
	（小）	97～100	2基
浮彫地藏型墓石		128	1基
板碑型墓石		115	1基
石灯籠		163	4基
手洗石		36	1基
合 計			43基

4 墓石系図



5 墓石系図の考察

小笠原家は、初代安勝から 12 代廣善まで、江戸時代を通して 12 代にわたって続いた。その間、系図でみる限り少なくとも 2 代安村と 6 代廣貞は側室の子であり、8 代廣保と 12 代廣善は他家からの養子である。

当時であって家を存続するために、側室や養子は必要不可欠であったが、当小笠原家においても例外ではなかった。側室についてはすでに「墓石の配置」で述べたので、ここでは小笠原家の養子について触れることにする。

5 代廣満には世継ぎがなく、弟の廣貞を養子にして 6 代当主として家の存続を図った。しかし、7 代廣芬のときも世継ぎに恵まれず、しかも、廣芬には娘もいなかった。そこで、廣芬は旗本・大岡作左衛門義但の娘を養女とし、小笠原数馬長儀の二男を婿養子として迎え、8 代当主とした。

7 代廣芬の代で、安勝の血筋は絶えたが、養子の 8 代廣保によって、小笠原家はしっかり守られた。

その後、10 代廣運の時は、世継ぎを決めぬまま亡くなってしまい、急きょ叔父の廣道が相続人となり 11 代当主となった。そして、旗本・篠山家から養子を迎え、家督相続により廣善を 12 代当主とした。

12 代廣善の時、江戸幕府は崩壊し、小笠原家として 12 代にわたって続いた当地の知行も終わった。その後の小笠原家の動向については、「IV 徳川幕府崩壊後の小笠原家」のところで述べることにする。



10 代廣運



11 代廣道

墓石の系図を見ていると、初代安勝の子女の墓石が多いのに気がつく。その中の墓石番号 11 番と 13 番は、他家に嫁した娘の墓石である。兩人とも旗本家に嫁いで嫡子をもうけ、その子が当主になっているのに、どうして実家の墓地に葬られたのか不思議である。

安村の父母、兄姉、妻（先妻・後妻）、子、孫等々、2 代当主安村に関係する墓石が多い。墓所にある 4 基の灯籠と手洗石も安村が奉納したものである。おそらく、現在の小笠原家墓所の原型は安村によってつくられたと考えられる。少なくとも、奥正面の 6 基は安村の建立である。2 代当主としての安村の権勢と旗本小笠原家の確立をみることができる。

III 旗本としての小笠原家

1 旗本とは

もとの意味は、戦場で主君の旗の立つ本陣の直属武士団のことで、転じて江戸時代、将軍の直属家臣団のうち、1万石以下お目見え以上の家格をもつ者を旗本といった。享保7年（1722）に行われた調査によれば総数約5,200名、そのうち100石以上500石以下の者が60%、三河以来の徳川家家臣を中心に、大名の一族や家臣などによって構成された。お目見え以下の御家人約1万7,000人とあわせ、その家来を含めると俗に「旗本八万騎」となり江戸幕府の軍事的基礎をなした。

番方（武官）と役方（行政、会計係）に分かれていた。小笠原家は番方の旗本で、軍事的緊張が続いた江戸初期は重視されたが、次第に重要性が低くなった。

大番組について

江戸幕府の軍制で、旗本で編成された将軍直属の戦闘部隊。江戸城や江戸市中を警備し、交代で大阪城・二条城にも勤務した。幕府開設前の天正15年（1587）の3組設置を起源として、寛永9年（1632）以降12組となる。各組に大番頭1名、組頭4名、番士50名で編成された。

小笠原家では、2代目（組頭）、3代目、4代目、7代目、8代目、8代目の次男の6名が大番役を務めた。



皇居に残る大番所

二条城勤務の大番（8代の二男・廣胖）

徳川将軍不在の二条城は、二条在番と呼ばれ江戸から派遣された武士が警備をし、毎年2組（1組50人）が4月に交代して番にあたっていた。小笠原廣胖はその在番中に没す。

右の写真は、二条城の大手門を入ったところに建っている番所跡で、大番役の詰所だった。現在は、人形をつかって大番役の侍が仕事をしている様子を展示してある。



二条城に残る番所

正面十間（19.6メートル）

奥行三間（6.06メートル）

新番組（旗本で編成された軍事組織）

寛永20年(1643)に新設された。旗本20人を1組として編成し、当初は4組だったが、後に8組となった。

小笠原家では大番を経て新番になった当主は、3代目、4代目、7代目である。

御納戸番（将軍の身の回りの世話役）

将軍家の金銀、衣服、調度などの出納係で、小笠原家では12代目当主が天保13年(1842)から幕末まで勤めた。

こぶしん 小普請（無役）

無役の旗本で、幕府は小さな普請（小破損の建築や土木工事）の人足を旗本や御家人に課していた。元禄3年(1690)からは金納（小普請金）となった。

小笠原家では、9代目、10代目、11代目が小普請だった。なお5代目、6代目については役職の記録がない。

2 小笠原家の知行地

旗本小笠原家の知行地は、天正18年(1590)入間郡移住時の450石から、天明6年(1786)時の1190石まで順調に増えて、幕末まで続いた。

- ・初代安勝 天正18年(1590) 沢村、田中村、峯村に450石を拝領する。
- ・2代安村 寛永10年(1633) 200石を加えられる。
- ・3代安光 寛文8年(1668) 50俵を加えられる。
- ・4代廣員 元禄10年(1697) 廩米300俵を改め、常陸国真壁郡、茨城郡に
采地を賜る。
- ・8代廣保 天明6年(1786) 遺跡を継いだときの知行地は1190石。
- ・10代廣運 1190石(旧旗下相知行調)
- ・12代廣善 幕末期の知行地1190石(旧旗下相知行調)

内訳

入間郡	田中村	340 石	
入間郡	入間川村	100 石	〈埼玉県文書館提供〉
茨城郡	小岩戸村（現小美玉市）	44 石 3 斗 3 升 3 合	
茨城郡	黒磯村（現水戸市）	76 石 3 斗 5 升 1 合 9 勺	
真壁郡	下川中子村（現筑西市）	124 石 6 斗 8 升 7 合	
真壁郡	海老ヶ島村（現筑西市）	174 石 5 斗 9 升 3 合	
真壁郡	西保末村（現筑西市）	61 石 3 斗 6 升 1 勺	〈桜川歴史資料館提供〉

茨城県桜川歴史資料館協力の調査によると、残念ながら真壁郡などでは小笠原家に関する文書などは見つかっていないとの報告であった。

慶応4年（1868）4月11日江戸城が明け渡されて、幕府が崩壊し、同年の9月に明治元年と元号が改められ、知行地は明治政府の管理となる。

3 役職

寛政譜や幕府旗本辞典から役職記録を拾ってみると、当主によって違いがあることがわかる。2代から4代、7代と8代は続けて役職を務め、12代で幕府が崩壊した。

- | | | |
|------|------------|---------------------|
| ・初代 | 太郎左衛門安勝 | 家康の近侍 |
| ・2代 | 太郎左衛門安村 | 大番、大番組頭、御留守居番 |
| ・3代 | 太郎左衛門安光 | 大番、新番 |
| ・4代 | 傳四郎廣員 | 大番、新番、桐間番、小納戸、新番（再） |
| ・5代 | 太郎左衛門廣満 | なし |
| ・6代 | 喜右衛門廣貞 | なし |
| ・7代 | 太郎左衛門廣芬 | 大番、新番 |
| ・8代 | 太郎左衛門廣保 | 大番 |
| | 次男 太郎左衛門廣胖 | 大番 |
| ・9代 | 傳四郎廣明 | なし |
| ・10代 | 長次郎廣運 | なし |
| ・11代 | 政之丞廣道 | なし |
| ・12代 | 太郎左衛門廣善 | 御納戸番 |



勤務中の大番役（二条城提供写真）

4 どのような生活をしていたか

代々の小笠原家が江戸時代の約260年、どのような生活をしていたかについては、詳細な記録が残っていない。そこで「江戸幕府役職集成の江戸城勤番武士の生活」より、千石級の旗本の生活を参考にして推定してみた。

旗本小笠原家の生活は、知行地からの年貢米によって賄われていて、俗に四公六民といわれ、領主4割、百姓6割で、1000石の場合は、実質400石余の収入で賄うことになる。小笠原家は初期450石から始まるが、8代当主の時は1190石なので、470石あたりの収入で生活していたと推定される。

1190石の旗本の場合を調べてみると、平時の登城には、侍4、5人、槍持2人、鍔箱持2人、馬の口取り2人、草履取り1人、中間^{ちゅうげん}1人の合計11人くらいは連れていた。

軍役（軍事上の負担）は、侍5人、立弓1人、鉄砲1人、槍持2人、甲冑持2人、草履取り1人、長刀1人、鉄箱持2人、馬の口取り2人、足軽1人、沓箱持1人、小荷駄2人の合計21人が必要だった。

奥には、女中が5、6人いて、その取り締まりの老女級の者が監督指揮にあたるとともに奥様付きとなっていた。千石級になると家庭の作法も厳しくなるから、奥様や子女の外出にはお付きの者が付き添った。また、嫁入り前の町屋の娘が行儀見習いの奉公にあがっていた。

5 江戸の屋敷

旗本の屋敷は役職によって敷地の広さや場所が異なる。小笠原家においても役職によって屋敷替えがあり、大番役として城に近い番町に屋敷を拝領した時代と無役で深川に移り住んだ時代があった。江戸城の西北にあたる北の丸の外側から千鳥ヶ淵一带と外堀との間に、大番、小姓組番、書院番などが所属する番士をまとめて配置したのが「番町」で、現在も四谷に番町の地名が残っている。

江戸絵図、国字分名集、旗下相知行調などに、小笠原家の江戸屋敷を示す資料を見つけることができる。

3代安光が当主だった元禄2年の江戸大絵図に小笠原太郎左衛門の屋敷がある。

文政3年（1820）に発行され、文政10年（1827）に改書された『国字分名集』によると、9代傳四郎廣明の屋敷は深川富川町にあり、
「清和源氏 本國三河 家紋三階菱 千百九十石

深川富川町 小笠原傳四郎」とある。

嘉永4年（1851）の「南本所豎川辺之地図」によると、深川に小笠原家の屋敷がある。ところが元治元年（1854）に再刻された尾張屋版の「東都番町大絵図」には、表四番町に小笠原太郎左衛門の屋敷がある。知行地だった田中村に嘉永4年（1851）10月付の「小笠原家屋敷替えの冥加金に関する文書」（36ページ参照）があることから、12代当主の小笠原廣善は、嘉永4年に深川から番町へ屋敷替えしたと推測される。

なお、江戸幕府旗本人名辞典の安政6年（1859）の項には六番町と記載され、明治政府が調査した「旧旗下相知行調」の入間川村の項によると、廣善の屋敷は新道二番町と記載されている。

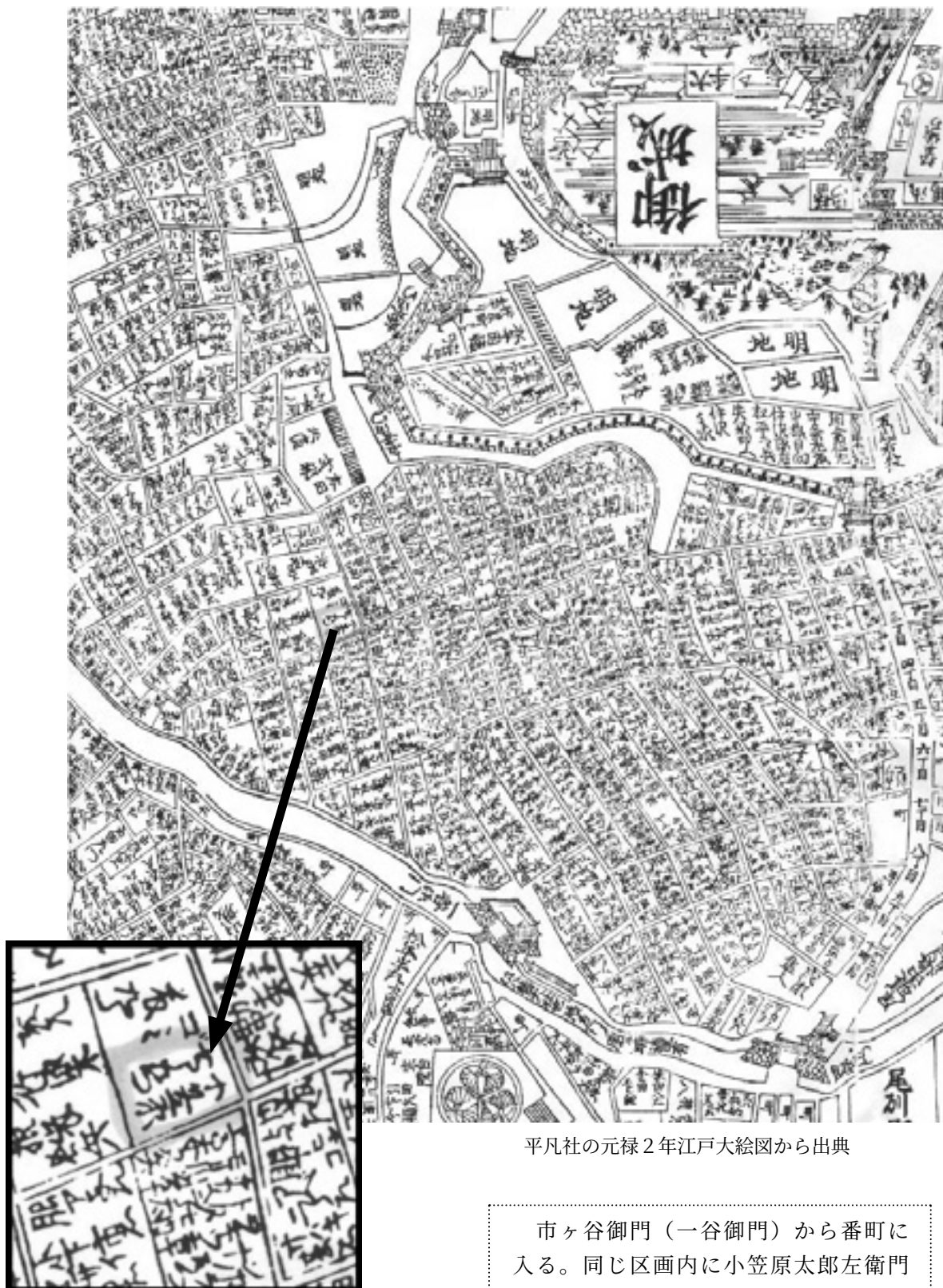


「国字分名集」

元禄2年（1689）番町にある小笠原家

絵図には、お城近くの番町に小笠原太郎左衛門の屋敷がある。

小笠原家は、2代当主、3代当主、4代当主と続けて大番役を勤めた。2代当主の安村は、^{くみがしら}組頭まで昇進したので、当然番町の屋敷に住んでいたと推測する。



平凡社の元禄2年江戸大絵図から出典

市ヶ谷御門（一谷御門）から番町に入る。同じ区画内に小笠原太郎左衛門とゴミ藤九郎の屋敷がある

拡大図

深川富川町の屋敷

嘉永年間発行の尾張屋版深川絵図・深川富川町に小笠原太郎左衛門の屋敷がある。深川絵図は嘉永年代の基本図から8回再版を重ね、安政2年（1855）には別人の小笠原源左衛門なる人物が記載されている。



中央公論社から出典

深川富川町の小笠原家屋敷は、あまり広くない。細川能登守の下屋敷と比べると狭い敷地である。隣にも小笠原姓の人物が住んでいる。

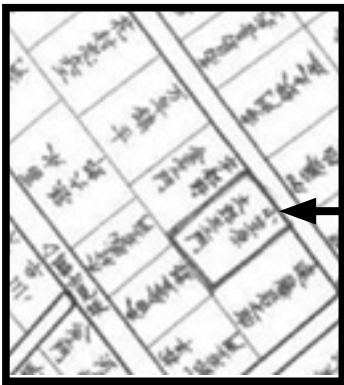
拡大図

文政3年（1820）の「国字分名帳」には、9代傳四郎が深川富川町に住んでいた記録がある。嘉永2年の番町絵図には12代当主廣善の記載がないため、嘉永4年（1851）に番町へ屋敷替えするまでは深川の屋敷に住んでいたと推測される。

元治元年（1864 年）の東都番町大絵図にある小笠原家

幕末には頻繁に江戸切絵図が発行されているが、基本図となる新刻版があり、何回も再刻されている。

元治元年（1864）の絵図は 10 版目の改正版で、小笠原太郎左衛門家がある。



拡大表示



人文社の江戸絵地図

屋敷替えの冥加金に関する文書



左図は、小笠原家が屋敷替えの冥加として、嘉永四年十月に田中村清水組の百姓より六両壹分貳朱、錢六百貳拾六文を請取ったことを示す文書である。

当主の太郎左衛門の奥書と印もある。

IV 領主としての小笠原家

1 小笠原家の知行地（領地）

小笠原家の知行地である旧沢村の集落は天岑寺の付近、旧田中村及び旧峯村のそれは、現在の狭山市駅から延びる西武鉄道新宿線と国道16号線との間にある。

小笠原家知行地周辺地図（現狭山市狭山周辺）



地図は日本地図センター電子国土より出典

『寛政譜』には、初代安勝のところで「天正十八年、関東入国ののち、武蔵国入間郡のうちにおいて采地四百五十石余をたまひ・・・」とあり、細部については述べられていない。そこで『新編武蔵風土記稿』をみると、入間川村の項に「・・・その後今の領主松平大和守が領地と小笠原政治郎・村越伯耆守・小野直次郎・田村庄三郎等が知行と入会となる。此の内小笠原が知行は天正十八年先祖太郎左衛門に賜りし所にて・・・」とあり、さらに田中村と沢村については、入間川の内田中村、入間川の内沢村とあった。そして田中村については「元禄の後には入間川之内田中村と記せり・・・小笠原政治郎が知行地なり」とあり、沢村についても「今も太郎左衛門が子政治郎知行なり」と記されていた。また、沢村との境について「西は本村及び田中の2村にて」とあり、入間川村を本村として、峯村についての記載はない。

以上のことから、元禄以降、田中村と沢村は入間川村の枝村と考えられ、峯村については入間川村の一部となっていたと思われる。

さらにこのことについて石仏に刻まれた村名から考えてみた。『狭山市史（民俗編）』をもとに、沢、田中、峯を刻んだ石仏を拾い出してみた。その結果、田中村を刻んだ石仏が12体、峯村が6体、沢村が5体見つかった。しかも、その中の1体、東三ツ木の薬師堂の境内にある貞享5年（1688）の石幢六地藏には、沢村、田中村、峯村、入間川村、風下村が刻まれていた。貞享5年の時には、田中村、峯村、沢村はそれぞれ独立した村であったことがわかる。

田中村と沢村については、その後幕末に至るまで田中村、沢村と刻まれていた。沢村については、石仏の数が少ないが、沢の集会場の三叉路にある天保12年（1841）の馬頭観音に「願主 澤村 横田浅右衛門」の銘文を見ることができる。

峯村については、狭山西峯霊園に明和5年（1768）の丸彫地藏に、はっきりと峯村と刻まれているが、文政7年（1824）の聖観音になると「武州入間郡入間川村峯」となり、東峯霊園の天保10年（1839）の大乘妙典石経壺部供養塔でも「施主 峯 念仏講中」とあり、「村」がつかなくなる。



石幢六地藏

以上のことから、田中村と沢村については、元禄以降入間川村のうち田中村、入間川村のうち沢村となったとしても、1村としての独立の体裁をもった村であったと考えられる。しかし、峯村については、いつころかはっきりしないが、幕末には、入間川村に包含されていたのではないかとと思われる。『新編武蔵風土記稿』に峯村がなかったのもうなずける。

いずれにしても、石仏に自分たちの村名をしっかりと刻んでいることは、領民の心の中に、自分たちの村としての強い意志がよみとれる。また、そこには旗本・小笠原家の領民であることへの自尊の心が感じられる。

2 小笠原家と寺社

天岑寺

所在地 狭山市沢 5-34

本尊は木造の釈迦如来坐像

開基は小笠原太郎左衛門安勝

開創はてんかいせいどん天海盛吞

現在の住職は 30 代目の丹下玉専氏

天岑寺は初代太郎左衛門安勝が開基となり、文禄3年（1594）に天海盛吞が開創した。安勝は父の遺骨を三河国安泰寺から改葬し、寺号を父の法名「天岑院殿紹

恩居士」にちなんで天岑寺と命名、15石を寺領として寄付した。寺領は慶安4年(1651)に朱印地となり、幕末まで小笠原家代々の菩提寺となっている。

昭和53年(1978)狭山市教育委員会発行の『狭山の文化財』によると、明治17年(1884)の由緒書として次のように記している。「当寺古記録の伝なし。然れども古老口碑に此地観音堂有しを一寺とせしと雖ども、其寺号不伝、然に文禄三(1594)甲午十一月十七日、地頭小笠原太郎左衛門尉安勝、亡父同摂津守安本為菩提再興して法諱の字により天岑寺という。一中略一 明治三年十二月八日焼失、同六年閏六月本堂、庫裡再建なり」とある。

天岑寺資料の「天岑寺沿革」に、小笠原家と村の関係を示す箇所がある。

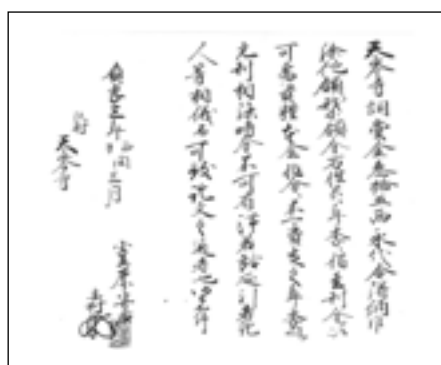
曹洞宗で大龍山天岑寺といい、一般的には「沢のお寺」と言われています。直参旗本という、直接将軍を守る身分のため、特別な権限を与えられた「小笠原家」は、「地頭」として、この周辺を治め、守っていました。一中略一小笠原の領主は、代々がスジの通った人道家で、いたずらに権力をふりまわして、いばることなく、近隣の村人に「お殿様」「お殿様」と呼ばれ、とても親しまれていました。



天岑寺本堂と30代目の住職

当初は、七堂伽藍が整い朱塗りの回廊が巡らされ、非常に豪華な寺であったが、不審火などで400年間に3度の火災があった。特に明治3年(1870)12月8日の火災では、惣門以外はすべて焼失したが、明治6年(1873)6月に本堂が再建された。現在の各伽藍は、奈良の薬師寺金堂や法隆寺などの修復や再建をした現代の名棟梁「小川三夫」氏により、平成6年(1994)から平成14年(2002)にかけて新本堂再建や珍しい五角形の鐘楼堂新築、狭山市指定文化財の惣門が修復された。

2代安村と10代廣運が天岑寺に出した文書



安村が貞享3年に天岑寺に出した祠堂金由緒書



10代廣運が文政12年天岑寺に出した「壁書」

天岑寺の惣門（狹山市指定文化財）

初代安勝が建てた惣門は、寛永初期の創建当時の面影をとどめている。建築様式は総けやき造り表間口3.64m、奥行き3mで、沖縄風の様式が感じられる四脚門、屋根は瓦葺き切妻。通霄関^{つうしょうかん}と書かれた扁額が掲げられている。

参拝者は、厳めしい建築様式の門をくぐって境内へ入り、参拝後は内側から穏やかな建築様式を見ながら帰っていくように工夫されている。



境内から見た惣門参道から見た惣門



境内から見た惣門

田中村の安穏寺（廃寺）

安穏寺は田中村（現狹山市狹山27番）にあったが明治に廃寺となる。『新編武蔵風土記稿』には、「熊耳峯と号す。曹洞宗 沢村の天岑寺の末寺。同寺の第六世海峯碧州^{かいほうへきしゅう}が草創して本寺である天岑寺の隠居所とする。

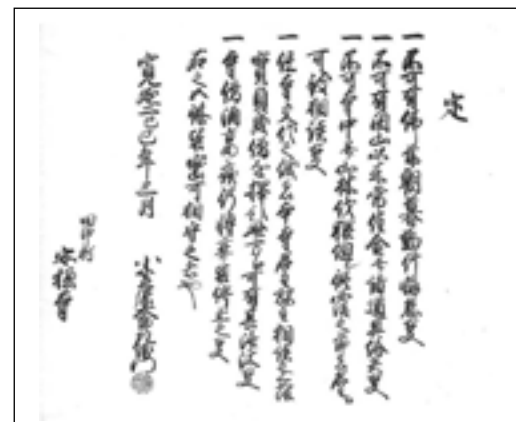
この境内は、地頭の小笠原政次郎の先祖である太郎左衛門安勝が陣屋を置きし所なりといふ。」との記載がある。

元文4年（1739）に建てられ、寛延2年（1749）に7代廣芬が「田中村 安穏寺」に対して「定」を出している。

安穏寺があった場所は、小笠原安勝が陣屋を構えた所と伝えられ、その跡地には代々の住職の墓、清水濱臣^{はまおみ}の墓（狹山市指定文化財）、東西寺の結界石などが残っている。



「安穏寺」入間川町誌より転写



7代廣芬が寛延2年に出した「定」

田中稲荷神社

現住所は狭山市狭山 27 番地

『狭山市の社寺誌』によると、「この本殿は寛延 3 年（1750）に建立された。愛宕神社本殿と同様に、萩野万次郎が建造し、小笠原家が寄進したものと考えられる。」と記載されている。

それを裏付けるように覆殿の棟に小笠原家紋「三階菱」がある。また、本殿の屋根棟に小笠原家紋「三階菱」の切り抜き、梁上かえるまたのかえるまた、寛延年中の切り抜きが付

けられ、本殿正面の扉には小笠原家の副紋「五七桐」が浮き彫りされている。

現在の田中稲荷神社は、5 名の地権者と地元の方々が大切に守っている。



田中稲荷神社



覆殿棟にある三階菱紋



本殿扉にある五七桐紋
小笠原家の副紋（替紋）

愛宕神社

旧峯村、現狭山市狭山 9 番地にある。

覆殿の屋根棟と本殿の棟、正面扉には、小笠原家紋「三階菱」の板の切り抜きが貼り付けられている。

さらに、本殿には宝暦 7 年（1757）の年号（板の切り抜き）と建造者名「萩野万次郎善勝」の墨書があり、小笠原家が寄進したものと伝えられる。

『狭山市の社寺誌』には「古老の言い伝えによると、当地を所領としていた小笠原太郎左衛門安勝の守護神として祭られたといわれている。」とある。



本殿の扉にある三階菱



覆殿棟にある三階菱紋



愛宕神社本殿

峯の東西寺（廃寺）

旧峯村、現狭山市狭山 15 番地にあった。『狭山市の社寺誌』によると、「沢の天岑寺の末寺で、開山は天岑寺九世と伝えられ、明治になって入間県の役所に出された文書には、『東西寺は宝暦（1751－1764）度開基』としてある。」と記載されている。幕末から明治にかけて住職の金隆が不身持ちのため明治 4 年（1871）10 月廃寺となり、天岑寺の明治 3 年（1870）の大火後に東西寺の建物は天岑寺に移されて、本堂と庫裏になった。東西寺の跡地には小さな墓地があり、代々の住職の墓石が残っている。また、東西寺の結界石は、安穩寺跡に移されて現存する。

徳林寺に寄進した絹本着色釈迦涅槃図

狭山市入間川 2-3-11 にある徳林寺が所蔵している涅槃図は、小笠原家が元禄元年（1688）に寄進した。裏銘文にも施主は小笠原氏とある。寄贈した元禄元年は 3 代安光が当主だったが、2 代安村が前年の貞享 4 年（1687）10 月 22 日に没しているのもので、晩年の安村が注文してあったとも推定できる。なお、3 代安光は寄贈した翌年に没している。

涅槃図とは、釈迦が亡くなったときの様子を絵にしたもので、弟子や諸王らが嘆き悲しんでいる姿が描かれている。作者は、御絵所むねさだ宗貞。大幅の掛物で、極彩色で描かれた希に見る優秀な仏画と評価されている。

（大きさは、縦 177.5cm、横 104cm）



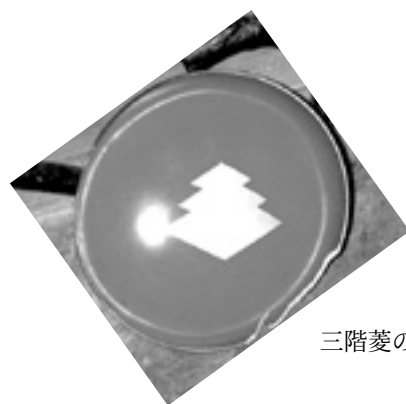
狭山市指定文化財 釈迦涅槃図

3 現地の調査をととして

当小笠原家は、江戸時代をととして領地替えがなく、一貫して当地の領主であった。領地内には、小笠原家の菩提寺をはじめ、今は廃寺となってしまったが、天岑寺の末寺である安穩寺と東西寺があった。さらに7代当主の太郎左衛門^{ひろよし}廣芬は、田中村に稲荷神社、峯村に愛宕神社を寄進し、小笠原家と領民との親密な関係が伺える。田中の稲荷神社、峯の愛宕神社とも、小笠原家知行当時の本殿は、昭和になって建てられた社殿の中におさめられ、地元の人々に大切に守られている。本殿を覆っている社殿の屋根の棟にもしっかりと小笠原家の三階菱の紋がついている。



愛宕神社に残されている古い屋根瓦



三階菱の盃

愛宕神社の側面に掲げてある由緒板には、旗本小笠原太郎左衛門安勝との関係が記載してある。また社殿の中には建て替え前の三階菱がついた古い屋根瓦（上の写真）が大切に保存されていた。



愛宕神社の側面に掲げられている由緒板

田中稲荷神社を訪ねたときは、自治会長はじめ4人の方に協力をいただいた。その中の一人の方は、小笠原家の三階菱の紋が入った朱塗りの盃を持ってきて見せてくれた。さらに、先祖が江戸まで年貢を運んだことや、小笠原家の墓石を江戸から運んできたことなどの話を聞くことができた。

小笠原家に関する文書を大切に保管している方、峯の愛宕神社のことを熱心に話す方など、この度の調査をととして、小笠原家に対する地元の人々の心情にふれることができた。

V 徳川幕府崩壊後の小笠原家 明治・大正・昭和

1 墓石を求めて － 12 代当主廣善－

小笠原家は天保9年（1838）に10代廣運が没し、後継がなかったので、叔父の廣道が急きょ相続人となり、11代当主になる。『江戸幕府旗本人名辞典』によると、天保12年（1841）に廣善が旗本の篠山家から養子として迎えられ、12代当主となった。当地には、廣善の文書もあり、12代当主として活躍したが、天岑寺の墓所に墓石はない。幕府崩壊後、静岡県の牧之原へ移住していたのである。

牧之原調査の結果、12代廣善は明治3年に彼の地で没し、種月院（曹洞宗）に埋葬されたが、その後、墓石は法光寺（日蓮宗）に移されていたことがわかった。

廣善の墓石は、小笠原家歴代当主と同型の笠付角柱型墓石だが、「小笠原家之墓」となっていて、左側面に「小笠原廣善」、右側面に「明治三庚午年四月十九日」と没年月日が刻まれていた。なお、法光寺と同じ宗派の長光寺には、13代廣直の母「小笠原寶鏡」と廣直の二男「小笠原廣貞」を1石に刻んだ墓石があり、すぐ側には女性の戒名の上に小笠原家の三階菱紋のある男女1石の墓石があった。その墓石は同じ開拓士族の伊東家に嫁いだ小笠原家の娘夫婦の墓だろうとのことだった。



12代廣善の墓石

なぜ、長光寺と法光寺の2寺に小笠原家の墓石がわかれて建てられたのか疑問だったが、静岡市の旗本研究家 前田匡一郎氏によると、牧之原開拓士族の1人が山を降りて長光寺で僧侶になる修行をし、その後に法光寺の住職となって士族たちの菩提を弔ったという。「小笠原家ゆかりの墓石が長光寺や法光寺にあるのは、同じ士族の縁で慕われたからではないか」とのことだった。

廣善の略歴

養父 小笠原廣道。天岑寺文書には廣道が廣善の養父。旧旗本相知行調では、権之助が養父とある。権之助は狭山市にも牧之原にも戒名も墓石もない。

実父 笹山摂津守 槍奉行

天保12年（1841）21歳 小笠原家の家督を相続する。
 天保13年（1842）22歳 御納戸番入
 天保15年（1844）24歳 養父の廣道が没する。
 弘化3年（1846）26歳 娘の晴が生後2カ月で没す。
 安政6年（1859）39歳 天岑寺に定書を出す。
 文久3年（1863）43歳 江戸幕府旗本人名辞典に
 「亥年43歳」の記録がある。
 慶応4年（1868）48歳 江戸より静岡へ移る。
 明治2年（1869）49歳 家督を義弟銀次郎に譲る。
 当主在任年数約28年
 明治3年（1870）50歳 牧之原で没。



廣善の花押

天岑寺の墓所に墓石はない廣善だが、墓所にある2つの墓石には、施主として廣善の名前が刻んである。

天岑寺文書によると廣善は、明治3年4月19日に没し、「宝珠院殿忠山良義居士」の戒名をもらっている。これは、種月院に残る廣善の戒名と一致する。

2 刀を鋤に替えて — 13代当主廣直 —

『江戸幕府旗本人名辞典』の小笠原の項、「牧」28頁に以下の記載がある。

小笠原銀次郎（明治4年）未29歳

先 （祖父）小笠原長次郎・小普請

（父）小笠原傳四郎・小普請

（兄）小笠原太郎・納戸番

禄 1,190石

役 明治2（1869）7月25日 部屋住み 金谷原開墾御用

明治2（1869）12月10日 家督8人扶持 手当60両

「牧」とは、「牧之原開墾士族名簿」のことで、それは昭和38年（1963）に静岡県金谷町役場で、倉庫の整理をしていたところ発見された貴重な手書きの原本を複製したものである。金谷町で発見された名簿には、士族207名で、初倉役場の名簿に36名の記載があった。金谷原は明治4年（1871）に牧之原と改称された。

「牧之原開墾士族名簿」によると、銀次郎の祖父は長次郎で、父は傳四郎とある。しかし、9代当主傳四郎とは年齢的に父子とは考えられない。この名簿によると9代傳四郎、10代長次郎、11代は「傳四郎」となる。11代当主の「政之丞廣道」は「傳

四郎」を名乗ったのか不詳。

いずれにしても、銀次郎は部屋住みで廣善のやっかいになっていたが、25歳の時に將軍徳川慶喜警護のために結成された「精銳隊」に入り、中^{ちゅうじょう}条景昭隊長と行動を共にして、水戸から駿府へと移動した。後に精銳隊は新番組と名前を変える。新番組は、明治2年（1869）7月に藩命で金谷原開墾方を命ぜられ手当金を給付されたが、地位や身分は新体制になった。

銀次郎は、明治2年12月に家督を相続し、13代当主として、8人扶持、手当は60両で二軒屋原の開墾をした。

しかし、その後に手当は支給されなくなり、刀を鍬に替えての開墾生活には、辛くて厳しい現実が待ち受けていた。

静岡県牧之原市にある牧之原神社には、「牧之原開拓記念碑」が建っている。この記念碑は大正7年（1918）、開拓士族の内田忠正が中心になって、同志の落合正中碑を建立したもので、碑の裏側に「明治二年牧之原移住開拓士族」302名の名前が刻んである。そこには小笠原廣直の名前もあった。



名簿にある小笠原
銀次郎身上書



記念碑にある「小笠原廣直」の拓本をとる。



小笠原廣直の拓本



塚本昭一氏の著書
より転写

島田市のお茶の郷博物館には、『牧之原開墾地絵図面と士族名簿』の原本がある。士族名簿には、一人一人が短冊状の和紙に記載されていて、小笠原銀次郎の名前や経歴も丁寧に書かれていた。また、明治時代に描かれた絵図面は今もきれいな色彩を保っていて16葉あり、島田市の指定文化財として大切に保存されている。その1葉に廣直の宅地と開墾地が描かれていた。

博物館には、士族が苦勞して開墾している様子や当時の家屋などが展示され、ビデオによる牧之原士族開拓の説明もあり、侍であった廣直たちが刀を鍬に持ち替えて開墾に従事している様子がよくわかる。

廣直が開墾に従事していた二軒屋原周辺の茶畑は、見渡す限りの広大なお茶畑で、牧之原開墾で苦勞した廣直を偲ぶことができる。



二軒屋原周辺のお茶畑

小笠原廣直の宅地と開墾地



○印は士族開墾地繪図面にある「小笠原廣直の宅地と開墾地」

繪図面を見ると、金谷道にそって小笠原廣直の宅地がある。宅地のそばに開墾地があり、少し離れたところにも点在して廣直の開墾地が4カ所に描かれている。廣直が耕した土地は合計1町4反余であるが、それは開拓士族の中では少ない方であった。

開拓の夢破れて巡査になり、晩年は東京で没した13代廣直

1町4反余の開墾をした廣直であったが、明治16年頃に山を降りて巡査になっていた。この事実は、静岡市の旗本研究家・前田匡一郎氏からの「廣直が巡査として試合に出た新聞報道記事がある」との連絡で知ることができた。

明治 18 年（1885）発行の静岡^{だいむ}大務新聞の記事

「明治 18 年 10 月 10 日、静岡追手町物産陳列場内に於いて催されたる会場で、県内警察署警吏、監獄署吏員の撃剣試合が行われた。出場者は 118 名である。出場者の名前・・・（省略）」 前田匡一郎氏提供

新聞記事には、大会に出場した巡査たち全員の名前が掲載されており、その中に小笠原廣直の名前が載っている。その記事により、廣直は明治 18 年には牧之原を出て巡査として働いていたことが判明した。廣直は見附警察署（現在の磐田市）の御用掛准等外という身分であった。

廣直が何年まで巡査をしていたか正確には不明だが、晩年は東京に移住し、明治 39 年（1906）2 月 19 日に東京神田で没した。64 歳。

明治 2 年（1869）、義兄の廣善から家督相続し、牧之原開拓に精出したが夢破れ、巡査となり明治時代を懸命に生きた人物だった。

3 小笠原家の終焉 － 14 代当主・15 代当主－

廣直没後の小笠原家について、島田市および当地の郷土史研究家の協力によって、「14 代当主」と「15 代当主」の足跡が判明した。

14 代小笠原廣俊

明治 6 年（1873）6 月 15 日 出生 廣直の嫡子。

明治 39 年（1906）2 月 19 日 33 歳 父廣直没したため、家督相続する。

大正 13 年（1924）2 月 5 日 51 歳 東京にて没。

15 代小笠原静子

明治 39 年（1906）2 月 16 日 出生 廣俊の長女。

大正 13 年（1924）2 月 5 日 18 歳 父廣俊が没したため、家督を相続する。

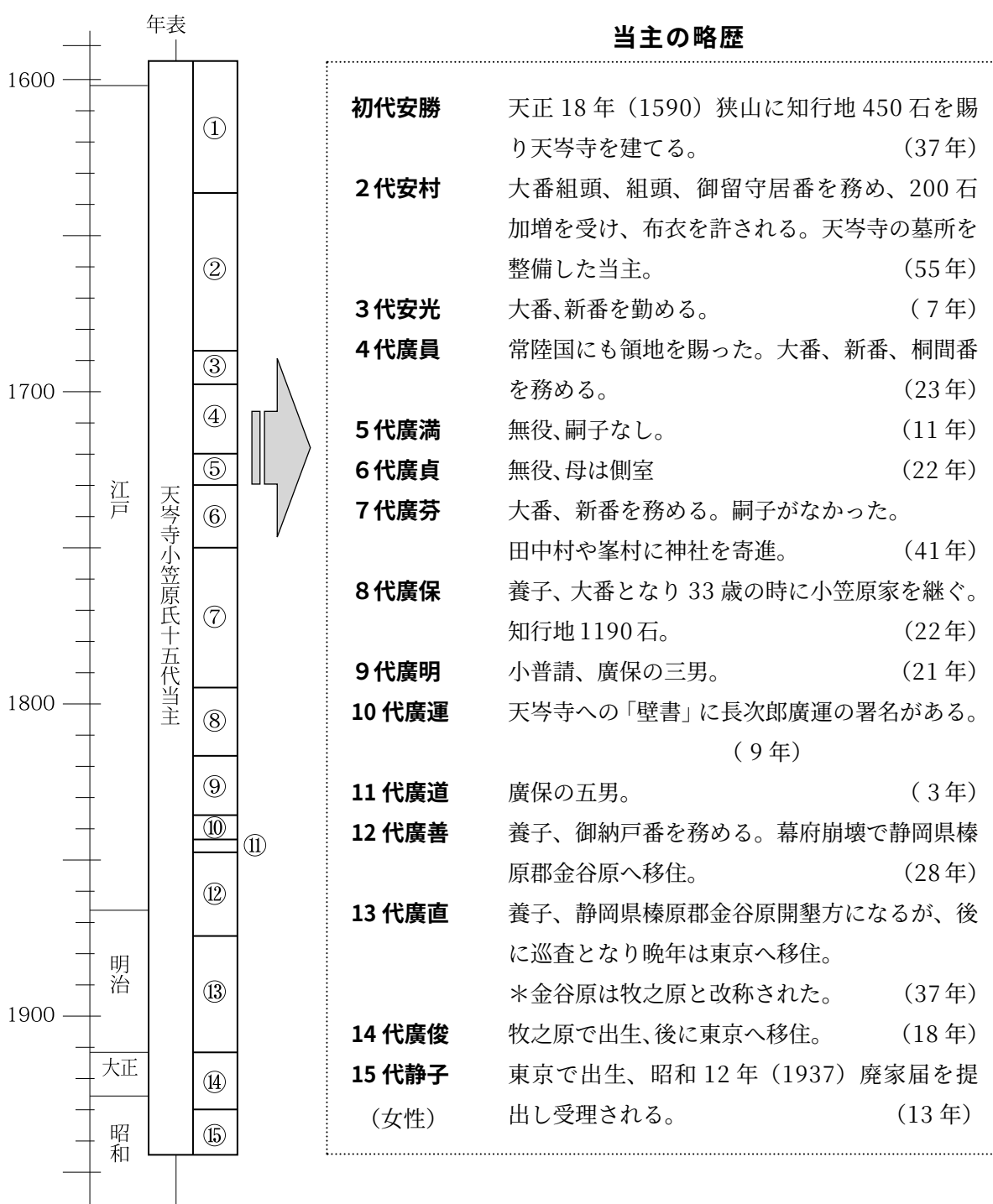
昭和 12 年（1937）10 月 8 日 31 歳 結婚のため、横浜区裁判所の許可を得て正式な裁判によって廃家の届けを出す。

昭和 12 年（1937）10 月 11 日 神奈川県平塚市長代理助役が小笠原家の廃家届を認めた。小笠原家の終焉。

***天正 18 年（1590）に始まった小笠原家は、昭和 12 年（1937）10 月 11 日に 347 年の長い歴史を閉じた。**

VI まとめ

この度の調査により、天正 18 年（1590）に小笠原安勝が現在の狭山市狭山の地（沢、田中、峯）に領地を賜って以来、旗本として 12 代、そして明治以降から昭和 12 年（1937）に静子氏の代で廃家になるまでの 3 代、合わせて 15 代にわたる小笠原家の当主をあきらかにすることができた。初代安勝から 15 代静子までの当主の年表と略歴をもって、まとめとする。 **注記：**資料に明確な年が記載されていない当主もあり（ ）内は、およその年数である。月数は省略した。



資 料 編

小笠原家墓所

墓石写真

墓石銘文一覧表



墓所の全体写真

墓石写真

墓石番号 1 ～ 6



写真下の数字は
墓石番号

左列

墓石番号 8 ～ 22



22 20 18 16 14 12 10 8

右列

墓石番号 7 ～ 21



7 9 11 13 15 17 19 21

左列

墓石番号 24 ～ 38



38 36 34 32 30 28 26 24

右列

墓石番号 23 ～ 37



23 25 27 29 31 33 35 37

歴代当主の墓石（初代から 11 代までは天岑寺墓所）
（12代は静岡県牧之原市法光寺墓所）



初代安勝



2 代安村



3 代安光



4 代廣員夫妻



5 代廣満夫妻



6 代廣貞夫妻



7 代廣芬夫妻



8 代廣保夫妻妾



9 代廣明



10 代廣運



11 代廣道



12 代廣善

墓石銘文（墓石番号1～6）

番号	1	2	3	4	5	6
年記	天正17年	寛永18年	-	寛永8年	-	-
西暦	1589	1641	-	1631	-	-
様式	宝篋印塔型 墓石	宝篋印塔型 墓石	笠付角柱型 墓石	笠付角柱型 墓石	笠付角柱型 墓石	笠付角柱型 墓石
銘文	（正） 天正拾七 己丑曆 小笠原摂津守源安元 地 天岑院殿紹恩居士 霜月廿九日	（正） 寛永拾八 辛巳曆 小笠原太郎左衛門尉源安勝 地 梅巖良清居士 二月三忌日	（正） 小笠原摂津守安本妻 （左） 圓寂 華林榮玉大姉 覺靈 四日	（正） 小笠原太郎左衛門尉安勝妻 （左） 圓寂 寛永八辛未天 月窓長秋大姉 覺靈 十二月十八日	（正） 圓寂 法蓮禪定尼 覺靈 廿六日	（正） 小笠原喜三郎 （左） 圓寂 長山宗珍居士 覺靈 元日
備考	初代の父 摂津守安元 墓石の上部より 空、風、火、水、地の刻あり	初代太郎左衛門安勝 墓石の上部より 空、風、火、水、地の刻あり	初代の父安元の妻 安元が安本と刻まれている	初代安勝の妻	初代安勝の娘	初代安勝の子 小笠原喜三郎

墓石銘文（墓石番号 7 ～ 12）

7	8	9	10	11	12
明暦 3 年	貞享 4 年	寛永15年	寛永11年	貞享 2 年	元禄 2 年
1657	1687	1638	1634	1685	1689
笠付 角柱型墓石	笠付 角柱型墓石	笠付 角柱型墓石	笠付 角柱型墓石	笠付 角柱型墓石	笠付 角柱型墓石
（正） 圓寂 明暦三丁酉天 桃岳宗見居士 覺靈 二月三日	（正） 圓寂 萬休院殿安居徹心居士 覺靈 貞享四丁卯年 十月二十二日	（左） 安村母 （正） 圓寂 寛永十五戊寅天 清月妙春大姉 覺靈 六月十四日	（左） 安村妻 （正） 圓寂 寛永十一甲戌天 月桂珠清大姉 覺靈 七月廿四日	（正） 掩粧 貞享二乙丑年 長生院殿大室理鏡大姉 淑靈 十一月十一日 （右） 小笠原十右衛門母	（正） 圓寂 皆元禄二己巳年 鐵性院殿一閑了無居士 覺靈 正月十四日
初代安勝の子	二代太郎左衛門安村 享年 八十二歳 安居は安村のこと	初代安勝の側室 二代安村の母	二代安村の先妻	初代安勝の娘 幡豆小笠原氏につながる 別家小笠原廣正の妻	三代太郎左衛門安光 安光の享年は不明

墓石銘文（墓石番号 13 ～ 16）

13	14	15	16
明暦 3 年	妻 当主 宝暦 3 年 享保 18 年	承応 2 年	妻 当主 - 享保 8 年
1657	1753 1733	1653	- 1723
笠付角柱型 墓石	笠付 角柱型墓石	笠付角柱型 墓石	笠付 角柱型墓石
（左） 前嶋十三郎妻 （正） 圓寂 蓮華院妙清日法 覺靈 明暦三丁酉天 二月晦日	（左） 宝暦三癸酉天七月四日 （正） 帰元 太清院殿瑞安如雲居士 覺位 養壽院殿永岩貞芳大姉 享保十八 癸 丑 天 七月二十八日 （右） 俗名 小笠原傳四郎廣員	（左） 安村妻 （正） 圓寂 命安貞壽大姉 覺靈 承應二 癸 巳 天 十二月廿三日	（正） 全男 靈樹院殿緑山常蔭居士 享保八 癸 卯 六月十八日 之位 性壽院殿玉想光印大姉 施主 同名喜衛門安直合㊦
初代安勝の娘 前嶋十三郎の妻	四代傳四郎廣員と妻 当主の享年 七十一歳	二代安村の後妻	五代太郎左衛門廣満と妻 廣満の享年 四十一歳

墓石の銘文（墓石番号 17 ～ 21）

17	18	19	20	21
-	天和 4 年	-	妻 安永 5 年 当主 延享 2 年	傳藏 宝暦 3 年 助五郎 宝暦 9 年
-	1684	-	1776 1745	1753 1759
笠付角柱型 墓石	笠付角柱型 墓石	笠付角柱型 墓石	笠付角柱型 墓石	笠付角柱型 墓石
（左） 小笠原長三郎母	（正） 圓寂 楓窓栄林大姉 覺靈 廿九日 （左） 前嶋十左衛門	（正） 天和四年 甲子 坂眞 寶隣宗善居士 覺靈 二月廿七日	（正） 同會 延享二乙丑年正月初七日 寂照院殿泉叟淨清居士 光陽院殿芳室智春大姉 安永五丙甲天五月十有三日 各靈	（右） 宝暦九己卯天十二月七日 小笠原助五郎 叟 （正） 同會 高峯仙巖居士 廓聖本然居士 小笠原傳藏 叟 覺位 （左） 宝暦三癸酉年七月十四日
三代安光の側室	前嶋十左衛門 安勝娘の子	三代安光の後妻	六代喜右衛門廣貞と妻 喜右衛門廣直は廣貞のこと 廣貞の享年 四十六歳 ＊孝子清三郎廣長は廣芬	六代廣貞の子 助五郎と傳藏

墓石銘文（墓石番号 22 ～ 25）

22	23	24	25
妻 当主 安永 3 年 天明 6 年	妾 妻 当主 天保15年 - 文化 5 年	延宝 2 年	延宝 2 年
1774 1786	1844 - 1808	1674	1674
笠付 角柱型墓石	笠付 角柱型墓石	笠付 角柱型墓石	笠付 角柱型墓石
(左) 安永三 甲 午 年三月廿六日逝 小笠原太郎左衛門源廣芬妻 (正) 歸元 松隆院殿長壽道音居士 鶴隆院殿萬壽妙音大姉 覺靈 (右) 俗名 小笠原太郎左衛門源廣芬 天明六年 丙 午 年九月十七日卒	(左) 天保十五 甲 辰 年四月二十六日 小笠原廣保 妾 (正) 寛光院殿義峯立節居士 桂壽院殿婉室貞薫大姉 普明院殿心月妙照大姉 (右) 次男母同姓平八長賢養女 四月五日卒實小笠原数馬長儀 太郎左衛門廣保文化五戊辰年 當家七代小笠原廣芬養子同氏	(左) 安村娘 (正) 圓寂 延宝二甲寅天 心光理春大姉 覺靈 二月二日	(左) 小笠原傳三郎妻 ヤ川 (正) 掩粧 玉清院殿昌甫妙永大姉 覺靈 延寶二年 甲 寅 年 八月廿七日
七代太郎左衛門廣芬と妻 廣芬の享年 六十歳	八代太郎左衛門廣保、妻と妾 廣保の享年 五十五歳	二代安村の娘	三代安光の先妻

墓石銘文（墓石番号 26 ～ 29）

26	27	28	29
寛延 2 年	正徳 4 年	延宝 3 年 延宝 2 年	-
1749	1714	1675 1674	-
笠付角柱型 墓石	笠付角柱型 墓石	笠付角柱型 墓石	笠付角柱型 墓石
（正） 寛延二己巳年 三月十四日 圓寂 本命院縁松常般大姉 覺位 （右） 小笠原廣直実母	（正） 掩粧 聚光院殿覺樹妙貞大姉 淑霽 十月初五日 （右） 米津十兵衛母	（裏） 小笠原太郎左衛門尉安村孫 （正） 同會 延宝二甲寅五月五日 夏月正因童子 玉幻智泡童女 延宝三乙卯八月二日 靈位	（正） 會 級波貞三大姉 三月十三日 洞岳靜雲居士 四月十三日 銀相妙鐵大姉 三月廿二日 覺具
四代廣員の側室で 廣貞の実母 廣直は六代廣貞のこと 「巳巳」は「巳巳」の誤り	系図の何処に位置するか不明	二代安村の孫二人	不詳 女性二人と男性一人

墓石銘文（墓石番号 30 ～ 32）

30	31	32
延宝元年	天保9年	享和2年
1673	1838	1802
笠付 角柱型墓石	笠付 角柱型墓石	笠付 角柱型墓石
（正） （左） 圓寂 延寶元癸丑天 銀翁玄鉄信士 覺靈 二月廿九日 小笠原長三郎	（右） （正） 天保九戊戌年八月八日 小笠原廣善建之 瑞光院殿法玉日良居士	（右） （正） （左） 出水通西寺町慈眼禪寺矣雖未繼 條錦城之戌役年二十九葬於洛陽 戌年夏六月十有七日卒於京師ニ 見撰拳千大衛即也今歲享和二壬 小笠原廣保嫡子吉次良廣胖及長 冲霄院殿鶴翎道仙居士 皇考墳墓彫刊石永垂不朽云爾 間郡澤邑大龍山天岑禪寺而烈先 世然為一進士是以幽葬於武州入
三代安光の子	十代長次郎廣運 九代廣明の子 建立者廣善は十二代当主	太郎左衛門廣胖 八代廣保の子 大番として活躍し、家継ぐ ことになっていたがその前 に京都で亡くなる 享年二十九歳 戌役（じゅやく）とは警備の 任務のこと

墓石銘文（墓石番号 33 ～ 36）

33	34	35	36
天保 15 年	妻 天保 5 年 当主 天保 7 年	元禄 12 年	宝暦 9 年
1844	1834 1836	1699	1759
墓石 笠付角柱型	墓石 笠付角柱型	墓石 浮彫地藏型	墓石 笠付角柱型
（正） （右） 安養院殿常光唯心 居士 天保十五甲辰四月二十日 小笠原太郎左衛門廣保 五男 小笠原政之丞廣道 行年四十八歳不禄	（左） （正） （右） 天保五 甲 午 年六月十五日 小笠原廣明 室 長壽院殿天心日祐居士 信生院殿遊譽香光大姉 天保七 丙 申 年十一月十五日 小笠原傳四郎廣明	（正） 元禄十二卯年 直心見指信士 七月十三日 田中村小笠原善次郎事	（左） （正） 宝暦九 己 卯 年 開室妙峯 信女 十一月八日 小笠原氏
十一代政之丞廣道 八代当主、廣保の五男 享年 四十八歳 「不録」は士の死を意味する	九代傳四郎廣明と妻 八代廣保の三男	小笠原善次郎 三代安光の子	小笠原氏女性 誰か不詳

墓石銘文（墓石番号 37 ～ 39）

37	38	39
延宝 3 年	弘化 3 年	延宝 4 年
1675	1846	1676
板碑型墓石	笠付 角柱型墓石	石灯籠
（正） 飯眞 青巖宗徳信士 覺靈 延寶三 乙卯 曆 五月廿二日	（左） 弘化三歳次六月十九日出生 呼晴女同年八月十六日卒 小笠原廣善女 （正） 玉鳳妙姿禪童女	（裏） 小笠原太郎左衛門尉安村 （左） 卯月十五日 （正） 右意趣民農策作徳厚之天應被予己官煩何哀之粵 為寄附 六趣闇夜智火為燈尔法燈求挑光慈尊欲迨朝者也云 石燈籠 （右） 延寶四 丙辰 曆
男性 （誰なのか不明）	十二代廣善の娘 生後二ヵ月で没 名前「晴」 女性で名前が刻まれているのは、この墓石のみである	二代安村が奉納 笠の四方に卍が刻まれている 四十番と一對

墓石銘文（墓石番号 40 ～ 43）

40	41	42	43
延宝 4 年	延宝 2 年	延宝 2 年	貞享 2 年
1676	1674	1674	1685
石 灯 籠	石 灯 籠	石 灯 籠	手 洗 石
（裏） （左） （正） （右） 小笠原太郎左衛門尉安村 卯月十五日 延寶四 丙辰 曆 右意趣 為寄附 石燈籠	（正） 延寶二甲寅天 奉寄進石燈籠 兩基 敬白 七月三日 小笠原太郎左衛門尉安村	（正） 延寶二甲寅天 奉寄進石燈籠 兩基 敬白 七月三日 小笠原太郎左衛門尉安村	（正） 奇進 墓所 貞享二己丑 施主 小笠原安居
二代安村が奉納 三十九番の石燈籠と同じ銘文が刻まれていると推定されるが、摩耗が激しく判読困難 三十九番と一对	二代安村が奉納 四十二番と一对で同じ銘文	二代安村が奉納 四十一番と一对で同じ銘文	施主の安居は二代安村のこと 貞享二年は「乙丑」だが、「己丑」と刻まれている

おわりに

幕末、狭山市内に知行地のある旗本は18家であった。

その中で田中、峯、沢の450石を知行地とした小笠原家が、12代の約270年の長きにわたって知行し、代々続いた当主や家族の墓石がある天岑寺の墓所は、他にあまり例のない文化財といえる。今回の調査によって墓石配置図、墓石系図を作成できたことで、墓所の文化財的価値を再認識するとともに、これからも大切に保存して後世に伝えていきたい。

最後に、調査にたずさわって感じたことを簡単に述べておわりの文とする。

墓所には初代安勝と父の安元をはじめ11代にわたる歴代当主と夫人の墓があることは記したが、さらに、ここには早世した者の墓石、養子先が見つからず部屋住みと思われるものもある。嫁ぎ先から実家に戻っていたと推測される女性の墓石、側室の墓石、童子や童女の墓石もある。しかも、それらの墓石は、当主と同じ笠付角柱型で、形も大きさも当主の墓石と同じ、戒名も「院殿居士（大姉）」とあり、墓石で見る限り家族間で差はなく、側室も同じである事実を報告したい。

2代当主「安村の孫」と刻まれた童子・童女の墓石も、当主と同じ形、大きさであり、生後2ヵ月で没した「晴」という乳児の小さな笠付角中型墓石もある。

調査するまでは、旗本の墓所なので厳めしい侍の墓石が多いであろうと想像していたが、38基の墓石には49名の戒名が刻まれ、男性は23名、女性は26名と女性のほうが多い。側室や童女たちの墓石も多くあり、女性や子供を大切にした小笠原家の家風が感じられる。

牧之原での小笠原家追跡調査では、幕府崩壊後は全く行方がわからなかった12代当主小笠原廣善の墓石が見つかり、冥福を祈りながら拓本をとった。13代当主の廣直が將軍を警護して静岡へ移動し、牧之原台地で刀を鋤にかえて開墾方として耕した土地の絵図を拝見し、緻密に描かれ彩色された絵図面の中に士族の侍魂をみた。しかし、夢破れて巡査になってしまった事実、時代に流されながらも生き抜いていた小笠原家のことを、ぜひ狭山市民の方々に知っていただきたい。

15代当主は女性であり、結婚のために小笠原家を廃家にしてしまったが、残念に思う反面、仕方がないことだったとも思う。その女性の子息らしい60代の男性が牧之原市にある小笠原家の墓石へお参りに来ていることを知り心が癒された。

初代から15代まで、小笠原家の347年に及ぶ長くて波乱にみちたあゆみは、狭山市の歴史にとって戦国時代から江戸、明治、そして昭和へと時代の流れを伝える貴重な資料の一つとなることを願う。

佐藤 芳子

参考文献

- 『新編武蔵風土記稿』復刻版（雄山閣・1977）
『旧旗下相知行調』（埼玉県発行・1986）
『狭山市史・民俗編』（狭山市発行・1985）
『狭山市史・地誌編』（狭山市発行・1989）
『新訂寛政重修諸家譜』（続群書類従完成会・1981）
『江戸幕府旗本人名事典』（小川恭一編著 原書房・1989）
『江戸の旗本辞典』（小川恭一編著 講談社文庫・2003）
『寛政譜以降旗本家百科事典』（小川恭一編著 東洋書林・1997）
『入間川町誌』（入間川町誌刊行委員会・1964）
『狭山市の社寺誌』（狭山市教育委員会・1984）
『狭山市現代史年表』（狭山市史編纂係・1979）
『狭山の文化財』（狭山市社会教育課・1978）
『狭山の指定文化財』（狭山市立博物館発行・1992）
『国字分明集』（国会図書館マイクロフィルム）
『牧之原開拓士族名簿』（金谷郷郷土史研究会・1964）
『牧之原土族開墾地絵図面』（金谷郷土史研究会・1964）
『江戸幕府役職集成 増補版』（笹間義彦著・雄山閣出版・1992）
『牧之原開拓史考―明治維新と茶業―』（大石貞男著・1981）
『牧之原残照 最後の幕臣たち』（塚本昭一編著・2006）
『幡豆小笠原氏と寺部城』（石川静男・福田啓志郎著
幡豆町歴史民俗資料館・1991）
『切絵図・現代図で歩く 江戸東京散歩』（人文社・2003）
『江戸大絵図』（平凡社 月刊太陽コレクション地図付録）
『江戸切絵図』（人文社・1995）

平成19年3月26日 印刷

平成19年3月30日 発行

狭山市文化財調査報告書第27集

狭山の旗本 小笠原家調査報告書

発行 埼玉県狭山市教育委員会
狭山市入間川1丁目23番5号
電話 04-2953-1111
印刷 有限会社 ミネ五十子印刷
狭山市狭山14-8
電話 04-2952-2701